第45回 全日本仏教徒会議

島根大会紀要

第45回　全日本仏教徒会議　島根大会

『異文化理解と共存』

～仏の心を稽古する～

目　次

大会テーマ　・・・

『異文化理解と共存』

～仏の心を稽古する～

世界の様々な地域で、人種差別による暴力が起こり、異教徒相互が傷つけ排除し合い、テロによる終わらない憎しみの連鎖が続いています。国内ではインターネット上で匿名の差別や偏見の書き込みが溢れ、見えない誰かが誰かを攻撃し排除しようとしています。また、自然災害が多発し平穏な日常が破壊され、誰もが不安で生きづらさを感じ、心身に「平和」を持てない現代社会の人びとは益々孤立化し、寛容さを喪失しています。

仏教者の道は、この世相を的確に捉えて「慈悲心」を鍛錬・稽古しながら、地道に衆生を励まし、寄り添い、そして支え合い、共に救われること。多様性に満ちたこの世界に生きて、違いを認め合い、受け容れまたゆるし合うこと。古代から「カミとホトケ」が共存し、豊かな文化を育んできた「しまね」から、今こそ、全世界に向けて仏智の「和」を発信し、大会を通し仏心を反復稽古することでグローバル社会に生きる力を養います。

大会関連行事として開催する基調講演では、仏教が中央アジアの土着信仰と融合しながらシルクロードによって東伝浸透したすがたを検証し、シンポジウムでは、異種文化共生の知恵を探ります。

ご挨拶

全日本仏教会第34期会長
第45回全日本仏教徒会議総裁
浄土真宗本願寺派門主
大谷　光淳

このたび第45回全日本仏教徒会議島根大会が開催されますにあたり、全日本仏教会を代表してご挨拶を申しあげます。

本大会は当初は昨年の10月２・３日に開催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により１年延期となり、さらに規模や内容を大幅に変更したうえでの開催となりました。刻々と変化する社会状況の中、懸命にご準備いただいた大会実行委員会をはじめ、島根県仏教会ならびにご関係の皆さまに深く感謝申しあげます。

いま、世界には武力紛争、経済格差、気候変動、差別を含む人権の抑圧など解決困難な課題が山積しています。さらに加えて新型コロナウイルス感染症がもたらす不安や生きづらさの中、多くの方が悩みや苦しみを抱えておられます。これらのことを反映してか、わが国では一昨年まで10年連続で減少傾向にあった自ら命を絶つ方の数が、昨年より再び増加に転じています。こうした苦難の中にあって、今日ほど仏智に教え導かれて生きることの大切さが求められている時代はありません。

仏法は国や地域、民族、また時代を超えたこの世界の実相、ありのままの真実を教えるものです。すべてのものはお互いにつながりあい、そこには自分だけで存在している固定的な実体は何一つないという「縁起」の思想こそ仏法の本質です。

また、仏法には自分自身のあり方としては欲を少なくし足ることを知る「少欲知足」、他者に対しては穏やかな顔と優しい言葉で接する「和顔愛語」という生き方があります。これらは自己中心的な心を離れ、むさぼりや対立の心から解放されていくという仏教徒の生き方を示しています。仏智というありのままの真実に導かれ、自分中心にしか生きられないことに気付かされ、繰り返し、繰り返し仏さまの大悲心を学ぶことで、そのように志して生きる人間に育てられるのです。

最後になりましたが、「『異文化理解と共存』～仏の心を稽古する～」をテーマに掲げた本大会の取り組みが、仏陀の「和」の精神のもと、すべての人々の多様性が尊重され、自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現への大きな一歩となりますことを切に念願いたしまして、私のご挨拶といたします。

ご挨拶

全日本仏教会第34期理事長
戸松　義晴

第45回全日本仏教徒会議が島根県において、様々な困難を乗り越えて本日開催されますこと、心よりお祝い申しあげます。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、本大会は1年延期せざるを得なくなりました。コロナ禍がここまで長期にわたるとはだれにも予測できず、本年に入り変異株の感染も拡大し、その感染力は想像を超えるもので、なによりもご参加の皆様やご家族ほか、大切な方々の健康と安全を第一に考え、苦慮の末、大会はインターネット配信で、参加はオンラインのみ、2日間の日程は予定を半日に変更しての開催となりました。思えば2017年の初夏、大会共同開催についてはじめて島根にご相談に伺ってから4年半、長い時間をかけて大会の準備を進めてまいりました。本来ならば全国から島根の地に足を運んでいただき、皆様に歴史と神話のふるさとである島根の神々しい空気を味わっていただきたかった。そして、島根県仏教会の皆様の心根や、大会に向けた熱い思いを感じながら本大会にご参加いただきたかったのですが、それがかなわず大変残念に思います。

「『異文化理解と共存』～仏の心を稽古する～」をテーマに行われる本大会を通して、仏教の精神や理解と共存の精神を稽古し、いま、目の前にある苦難を解決していく智慧と慈悲の力を得ていけたらと願っております。

同時に本大会は、コロナ禍における新しいスタンダードを提示し発信する場でもあると考えております。皆様との物理的距離を埋めることは難しいですが、同じ時を共有して互いに思いを寄せあうことで、心の距離をぐっと近づけることができます。アフターコロナの社会において、寺院や檀信徒の繋がりの構築にも、様々な可能性があると期待しています。

新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方々へ哀悼の祈りを捧げ、また、感染された方々の早期ご快復、医療従事者やエッセンシャルワーカーの皆様が感染せずに任務を全うできますよう祈念いたしますとともに、このコロナ禍が終息し世界に平和な日々が訪れ、皆様にも島根県へお越しいただける日が来ますよう心より念じ申しあげます。

むすびに、苦難のなか、大会開催にご尽力賜りました清水谷善圭大会会長、伊東充伸実行委員長をはじめとした島根県仏教会の皆様に感謝申しあげ、島根県の皆様、並びに本日ご参集の皆々様のご健勝を念じ申しあげてご挨拶の言葉といたします。

ご挨拶

島根県仏教会会長
第45回全日本仏教徒会議島根大会大会長
清水谷　善圭

本大会は元来、昨年10月２日・３日に開催する予定でした。新型コロナウイルス感染拡大により、1年延期致しましたが、なお収束の見通しが立たず、10月２日のみ、オンライン限定という開催形式を取らざるを得なくなりました。来場を楽しみにしていただいておりました仏教徒の皆様には本当に申しわけ存じます。事情をお汲み取り下さい。

さて、島根県は出雲国・石見国・隠岐国からなり、特に出雲国は有史以前から日本の玄関口として栄え、『日本書紀』や『出雲国風土記』の国譲り神話や素戔嗚尊（スサノオノミコト）の活躍が有名なように、「神の国」としてよく知られた地域であります。本大会を開催するに当たり、神仏が互いを尊重することで共存するこの地の特色を大会に活かすべく、「『異文化理解と共存』～仏の心を稽古する～」とのテーマを掲げ準備を進めてまいりました。

近年、国連によって17の持続可能な開発目標よりなるSDGsが採択されました。この中でも、私たち仏教徒にとって特に心がけなければならないのは、目標16に掲げられた「平和」ではないでしょうか。ともすれば自国主義・利己主義に陥りがちな社会において、大切なのは異文化への理解であり、その上に共存の世界、そして世界の平和が成り立つものと考えます。こうした想いのもと、基調講演の講師には安田治樹先生（立正大学名誉教授）をお迎えし、地域の文化とギリシャ文化とが巧みに融合し、共存しながら仏教文化が大きく花開いたウズベキスタンの遺跡調査から異文化理解と共存の知恵を学び、併せて４名の先生にご登壇いただく「異文化交流の歴史から共生の知恵を学ぶ」と題したパネルディスカッションも企画いたしました。これらは別に収録してDVDを作成し、お申し込みいただいた参加者の皆様にお配りいたします。ご期待ください。

また当日は、法要に続き釈徹宗先生（相愛大学教授）より本大会のテーマに則したご講演をいただき、これらをオンライン配信でご覧いただきます。本大会が、世界の人々が心を一つにして、醜い争いや差別のない平穏で安寧な社会づくりへの一助となることを願って止みません。

島根県仏教会は小規模ではありますが、本大会の円成を願い、理事ならびに実行委員諸師がまさしく手弁当で準備に尽力してくださいました。加えて、県内1000か寺余の会員寺院御住職様および協賛広告へご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

さらには大規模大会の運営経験に乏しい私どもに、総局をあげてご指導・ご協力を賜りました理事長 戸松義晴様をはじめとする全日本仏教会の皆様にも深甚なる感謝を申し上げます。

最後となりましたが、仏教益々の興隆と仏教徒皆々様のご健勝とご清栄を祈念申し上げます。

ご挨拶

第45回全日本仏教徒会議島根大会実行委員長
伊東　充伸

この度全日本仏教会会長 浄土真宗本願寺派 大谷光淳御門主をお迎えして第45回全日本仏教徒会議島根大会を開催することとなりました。

令和２年に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染の蔓延という未曽有の混乱の真っただ中にあり、大会も１年延期、開催規模縮小という憂き目に遇っております。しかしながらこの大会の成功を目指して４年前から計画、準備を鋭意進めてまいりました。

現下の世界は異宗教、異文化、異人種への謂われなき差別や分断が広がり、戦乱や暴力が多くの人々に恐怖や不安を植え付け、弱者は虐げられ、平安な生活が奪われ、平和が壊されようとしています。私ども島根県の仏教徒は現状を憂い、本大会の開催趣旨を「異文化理解と共存」と掲げ、「世界平和を願う」「仏の心を稽古する」とテーマを掲げました。そのような世情を、一人ひとりが仏智慧によって的確に捉え、慈悲心によって解決のために行動する一助となることを願っています。

仏教の根本は「自利から利他へ」であり、自己を鍛錬しつつ他者の幸せを願う気持ちが私たちの心に「自他を慈しむこころ」を生み、必ず世界の平和を実現するものと確信しています。

私たちの郷土島根には、古くから「カミとホトケ」が共存しながら豊かな文化を育んできた不思議な力が隠されているかも知れません。今大会では島根県における異文化理解と共存の姿を、教義や歴史的な観点からの仏教の「受容性」「寛容性」について専門研究者の発表や講演をいただき、互いに世界の平和を実現するためにお釈迦様のみ教えである「他を許す心」「互いに譲りあう心」「他を慈しむ心」の大切さを学んでまいります。私たち仏教徒の道は、「慈悲心」を鍛錬し、稽古して、この多様性ある世界の中で 共生の先達となることにあると思います。

本大会では、仏教東伝の歴史を通じて、異文化共存の知恵を探ります。さらに宗教・宗派を超え、お釈迦様の教えのもとに手を取り合って地域の平安、世界の平和を求めて「慈しむ心」を育み、この島根から日本各地へ、ひいては世界に「世界平和」を発信したいと思います。

สำนักงานใหญ่
องค์การพุทธศาสนิกสัมพันธ์แห่งโลก
616 ในอุทยานเบญจสิริ
ซอยสุขุมวิท 24 แยกซอยเมธินีเวศน์
ถนนสุขุมวิท เขตคลองเตย กรุงเทพฯ 10110
โทร : 02 661 1284-7 โทรสาร : 02 661 0555

HEADQUARTERS
THE WORLD FELLOWSHIP OF BUDDHISTS
616 BENJASIRI PARK
SOI MEDHINIVET OFF SOI SUKHUMVIT 24
SUKHUMVIT ROAD, BANGKOK 10110, THAILAND
TEL : +66 2 661 1284-7 Fax : +66 2 661 0555

Website : www.wfbhq.org
E-mail : wfb_hq@truemail.co.th

Congratulatory Message from
H.E. Phan Wannamethee
President of the World Fellowship of Buddhists
on the 45th General Conference of
Japan Buddhist Federation
Shimane Civic Center, Matsue, Shimane Prefecture
October 2, 2021

On behalf of the World Fellowship of Buddhists (The WFB), its sub-organizations – the World Fellowship of Buddhist Youth (WFBY), the World Buddhist University (WBU), all Regional Centres and its networking organization, I would like to convey my sincere congratulations to the Most Venerable Kojun Ohtani, President of the Japan Buddhist Federation (JBF), Reverend Zenkei Shimizutani, President of Shimane Buddhist Association for hosting the 45th General Conference of JBF in Matsue City, Shimane Prefecture.

The world is more and more interconnected but it does not mean that individuals and societies really live together. Today there is more information, technology and knowledge available than ever before, but adequate wisdom is still needed to prevent conflicts and to make it possible for all to peacefully live in harmony. In our increasing diverse societies, it is essential to ensure harmonious interaction among people and groups with plural, varied and dynamic culture identities as well as willingness to live together. Therefore, intercultural understanding is an essential part of living with others in the diverse world. Culture is a total way of life and is so inextricably woven into our identity and who we are. Communicating and establishing relationships with people from different cultures can lead to lots of benefits, including healthier communities, and reduced conflict. Intercultural dialogue is to foster respect and openness and provide chances for people with the means to engage with each other that flourish into peaceful coexistence. In our era of global interconnectedness, the assertion of cultural identity can only be envisioned on the basis of mutual respect and the acceptance of diversity.

I hope that the theme of this General Conference "Intercultural Understanding and Coexistence – Training Buddhist Minds" which will be discussed and shared perspective at this General Conference will enable the fruitful outcome for all of us to adopt it into our way of living.

The excellent relationship of JBF and The WFB throughout the times on several activities, especially humanitarian assistance during normal time or difficult time like nowadays, JBF always genuinely commit to assist people in distress. We are highly commendable for steadfast of JBF in this regard.

On this special occasion, I wish every success in your participation in this 45th General Conference of Japan Buddhist Federation.

May the grace of the Holy Triple Gem and by the blessing of Dhamma be endowed all of you with health and happiness in life.

Phan Wannamethee
The World Fellowship of Buddhists

大谷光淳全日本仏教会会長、また清水谷善圭大会会長並びに島根県仏教会の皆様。この度、島根県松江市にて第45回全日本仏教徒会議島根大会が開催されますこと、WFB世界仏教徒連盟、またその傘下組織であるWFBY世界仏教徒青年連盟、WBU世界仏教徒大学、全WFB地域センター、及びネットワーク組織を代表し、心よりお慶び申し上げます。

私たちは現在、より容易かつ頻繁に、より早くつながる世界に生きていますが、それは必ずしも個人や社会が真に共生しているという意味ではありません。多くの情報、技術、知識を利用できる社会となりましたが、紛争を防ぎ、すべての人が平和に暮らせるようになるためには、十分な智慧が依然として必要です。ますます多様化する社会において、様々な文化的アイデンティティを持つ人々の友好的な交流、そして共に生きていこうという人々の意思を確保することが重要です。なぜなら、多様な世界で共存していくためには、異文化理解が不可欠であるからです。文化は生き方そのものであり、私たちのアイデンティティ、私たちが誰であるかということと密接に結びついています。異なる文化の人々とのコミュニケーション及び関係の確立は、より健全なコミュニティを作り、紛争の減少など多くの利益につながる可能性があります。異文化間の対話は尊重と寛大性を育み、平和な共存のために人々が関わりあう機会をもたらします。グローバルにつながりあう今、互いに尊重しあい多様性を受容することなくして文化的アイデンティティの主張を考えることはできません。

今大会において、「『異文化理解と共存』～仏の心を稽古する～」というテーマが議論され視点を共有することによって、今私たちが生きていくなかで助けとなるような、実りのある成果がもたらされることを願っています。

全日本仏教会とWFB世界仏教徒連盟は、特に災害時における人道支援活動、またその他多くの活動を共にする中ですばらしい関係を築いてまいりました。全日本仏教会におかれましては常に苦しんでいる人々を支援してこられ、その確固たる姿勢は賞賛に値するものであります。

この度の第45回全日本仏教徒会議島根大会の成功を心よりお祈り申し上げます。

三宝と仏法のご加護によって、皆様に健康と幸福がもたらされますよう祈念いたします。

世界仏教徒連盟会長

パン　ワナメッティ

祝　辞

島根県知事
丸山　達也

第45回全日本仏教徒会議が、ここ島根県において開催されますことをお慶び申し上げますとともに、皆様を心から歓迎いたします。

本大会は、新型コロナウイルス感染症の影響により開催が延期されておりましたが、この度、「『異文化理解と共存』～仏の心を稽古する～」をテーマに、縁結びの地である島根を会場に開催される運びとなりました。島根での開催にあたり、御尽力されました公益財団法人全日本仏教会及び島根県仏教会をはじめとする関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、皆様にはこれまで長年にわたり、救援活動や国際文化の交流など、世界平和の進展に寄与する活動を精力的に行っておられますことに深く敬意を表します。

さて、島根県には、縁結びで有名な出雲大社、国宝の松江城、世界遺産の石見銀山遺跡、石見神楽、隠岐ユネスコ世界ジオパークなど、数多くの豊かな自然や古き良き文化・歴史があり、いにしえの頃から異文化交流の地でもありました。

本大会の冒頭で上映されます「隠岐国分寺蓮華会舞」は平安のころ隠岐に伝えられたとされ、現代まで受け継がれております。古代の宗教儀式の様子を色濃く残していると言われ、その起源として、インド、中国、朝鮮半島と広くアジア各地の舞踊が考えられております。本大会のテーマにも通ずる、国際色豊かな舞です。

世界遺産に登録されている石見銀山遺跡は、16世紀から17世紀にかけて、採掘された銀が海外にも大量に輸出され、中国や朝鮮半島などのアジア諸国とポルトガルやスペインなどのヨーロッパ諸国を交易で結ぶ役割の一端を担いました。

また、開催都市である松江市は、東洋思想研究の世界的権威である中村元博士生誕の地であり、多くの文化財を保有し、小泉八雲の文筆を通じて世界的に著名であることが評価され、京都、奈良に次いで日本で3番目に「国際文化観光都市」となった自治体です。

皆様には、こうした古き良き文化・歴史が残る島根の魅力に触れていただければ幸いです。

結びに、本大会の御成功と公益財団法人全日本仏教会及び島根県仏教会の御発展、並びにお集まりの皆様方の今後益々の御活躍をお祈りいたしまして、お祝いの御挨拶といたします。

祝　辞

松江市長
上定　昭仁

第45回全日本仏教徒会議島根大会が、松江市で開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

今大会の開催に当たっては、新型コロナウイルス感染症の影響により、例年に増してご苦労が多かったことと拝察しており、関係者の皆様のご尽力に深く敬意を表します。

さて、本市は、ラムサール条約登録湿地の宍道湖・中海と雄大な日本海に抱かれた「水の都」であり、『出雲国風土記』に残る「古代出雲文化」や国宝松江城を象徴とする「城下町文化」が栄え、その名残をとどめる神社・仏閣、茶の湯、和菓子の伝統文化は、今も市民の暮らしに溶け込み息づいています。

そして、小泉八雲の著書『知られざる日本の面影』により、明媚な風光と人々の暮らしは世界に紹介され、京都、奈良と並ぶ「国際文化観光都市」として、数多くの文人墨客が訪れるとともに、古代からの長い歴史が育んだ文化に溢れる土地柄において、たくさんの偉人を輩出してまいりました。

その一人である本市出身、名誉市民の中村元博士は、インド哲学や仏教学を中心とする東洋思想研究の第一人者であり、2012年には、業績の顕彰と学術の振興に寄与する「中村元記念館」が市内に開設され、インドとの交流の懸け橋となっています。セクショナリズムの壁を越え、世界平和への道を示した中村博士の研究は、今も世界中の研究者や学生に影響を与えていますが、この研究は、貴会議の活動や大会テーマである「『異文化理解と共存』～仏の心を稽古する～」にも通じるところであり、今大会を機に貴会議と本市とのご縁がより一層深まることを期待しております。

今回、全国の関係者の皆様をお迎えすることは叶いませんでしたが、新型コロナウイルス感染症が収束した折には是非本市にお越しいただきまして、国宝松江城、中村元記念館、茶の湯文化、豊かな「食」などをご堪能いただきたいと願っております。

結びに、今大会のご成功と公益財団法人全日本仏教会の益々のご発展、並びにご参会の皆様方のご健勝、ご活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

10月２日(土)

島根県民会館大ホール

12:30　「隠岐国分寺蓮華会舞」上映
オンライン・オープニング（島根県紹介）映像配信

13:00　第１部　法要
開会法要
　導師　清水谷　善圭 師（大会会長・島根県仏教会会長）
世界平和を願う法要
　導師　伊東　充伸 師（大会実行委員長）

13:40　第２部　開会式典
開式の辞　　柳楽　一学 師（大会実行委員会 企画式典部長）
大会会長挨拶　清水谷　善圭 師（島根県仏教会会長）
大会総裁挨拶　大谷　光淳 門主（全日本仏教会会長 浄土真宗本願寺派）
祝　　辞　　丸山　達也 様（島根県知事）
来賓紹介・日程案内
閉式の辞　　吉田　明弘 師（大会副実行委員長）

14:30　第３部　講演
演題 「仏の心を稽古する」
講師　釈　徹宗 師（相愛大学副学長･浄土真宗本願寺派 如来寺住職）

15:30　第４部　閉会式典
開式の辞　　柳楽　一学 師（大会実行委員会 企画式典部長）
挨　　拶　　戸松　義晴 師（全日本仏教会理事長）
大会宣言　　伊東　充伸 師（大会実行委員長）
大会旗返還・受け渡し　　次期開催地　山梨県仏教会へ
次期開催地代表挨拶　山梨県仏教会会長　近藤　英夫 師
閉式の辞　　吉田　明弘 師（大会副実行委員長）

「隠岐国分寺蓮華会舞」上映

「隠岐国分寺蓮華会舞」の由来

奈良時代から平安時代にかけて日本に古代中国・朝鮮などから大陸文化が盛んに移入され、芸能面でも舞と楽を一緒にした無言仮面劇が多量に入ってきました。それらは、一度都に入り、やがて全国の主な寺社の祭の余興として奉納公演されました。

平安時代から隠岐島に伝わる国の重要無形民俗文化財「隠岐国分寺蓮華会舞」は、古代の宗教儀式と大陸文化の影響を感じさせながら、宮廷舞楽の流れを汲む大変貴重な芸能で、幕末以前までは120種の舞を五日五晩舞い続け５年に１度催された島民の楽しみでもありました。

明治２年に起こった隠岐騒動・廃仏毀釈により一時中断をしていたが、大正期に七つの舞が復活し現在４月21日の隠岐国分寺「春季大法要」（月遅れの正御影供＝弘法大師ご命日・ご入定法要）の際に奉納公演されています。

隠岐国分寺蓮華会舞　プロフィール

◇昭和49年　隠岐国分寺蓮華会舞保存会　設立
◇昭和52年　国指定重要無形民俗文化財　認定
◇平成３年　島根県文化奨励賞　受賞
◇平成５年　パリ日本文化祭参加公演
◇平成20年　サントリー地域文化賞　受賞

第1部

松江水灯籠100本の行燈がほのかに灯る舞台

開会法要

荘厳な天台声明が館内に響き渡り、大会会長・全日本仏教会副会長・島根県仏教会会長である導師 清水谷善圭師が入堂された。そして「三礼如来唄・表白・般若心経・南無大恩教主釈迦牟尼如来・後唄」の次第で執り行われた。式衆は、島根県仏教会加盟団体から出仕した25名の代表が勤めた。

天台宗僧侶による声明

大会趣旨を表白する、導師 清水谷善圭師

世界平和を願う法要

私たち仏教徒の平和を願う思いが島根から全国へ、そして世界へと広がることを願い、「世界平和を願う法要」が厳修された。伊東充伸大会実行委員長が導師を勤め、「『世界平和を願うリレー行脚たすき』奉呈・『世界平和を願う写経』奉納・『復興滝桜苗』上程・普同三拝・香語・「三帰依文」・普同三拝」の次第で執り行われた。

導師　大会実行委員長　伊東充伸師　入堂

導師入堂を迎える式衆

「世界平和を願う」主旨の香語を唱える導師

出仕した県仏教会加盟団体代表僧侶

第2部

清水谷善圭大会会長　挨拶

大谷光淳大会総裁　挨拶

第２部　開会式典　舞台全景

開会式典

主催者である大会会長 清水谷善圭師、オンラインにて大会総裁・全日本仏教会会長・浄土真宗本願寺派 大谷光淳門主の挨拶に続き、全日本仏教会副会長の瀬川大秀 真言宗御室派管長、原井日鳳法華宗〈本門流〉元管長、西山明彦律宗 元管長、東伏見具子 公益社団法人 全日本仏教婦人連盟会長の４名様から挨拶を頂いた。続いて、丸山達也 島根県知事から歓迎とお祝いの言葉を頂いた。

島根県仏教会 柳楽一学副会長　開式の辞

丸山達也 島根県知事　祝辞

島根県仏教会 吉田明弘副会長　閉式の辞

全日本仏教会副会長（大会副総裁）の皆様をオンラインでのご紹介

第3部　記念講演「仏の心を稽古する」

相愛大学副学長・浄土真宗本願寺派 如来寺住職

釈（しゃく） 徹宗（てっしゅう） 師

1961年生まれ。宗教学者・浄土真宗本願寺派如来寺住職、相愛大学人文学部教授、特定非営利活動法人リライフ代表。専攻は宗教思想、人間学。『不千斎ハビアン―神も仏も棄てた宗教者』（新潮新書）、『法然親鸞一遍』（新潮新書）、『死では終わらない物語について書こうとおもう』（文藝春秋）、『お世話され上手』（ミシマ社）、『落語に花咲く仏教－宗教と芸能は共振する』（朝日選書）など著書多数。

第45回全日本仏教徒会議島根大会へのご参加、誠に尊いことでございます。本日は「仏の心を稽古する」というテーマをいただきました。どこまでテーマに沿ったお話ができるのか、心もとないことではありますが、おつき合いのほどよろしくお願い致します。

ご存知のように、新型コロナウイルスのパンデミックが収束していません。こういう事態に、仏教が語るべきことは何か、何が語れるのか、何が提示できるのか、自分なりにいろいろ考えております。

［1］二項対立のワナ

今の状況において、仏教が言えることのひとつは、「二項対立のワナ」にはまるな、ということだと思います。これは仏教がずっと説いてきたことです。

イスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリは、コロナ後の世界は（感染症対策を建て前にして）監視社会の傾向が強まるのではないかと懸念しています。そして、私たちは「プライバシーか健康か」といった誤った選択設定に陥ってしまう可能性を警告しています。

この誤った選択設定の二者択一は、他にもいろいろあると思います。たとえば、「強権的施策と民主的手続き（全体の利益と個人の自由）」などもそうでしょう。今回の状況の中で、強権的な手法が良いと感じた場面がありましたよね。民主主義というのは、とにかく時間がかかります。だから、「今はそんな場合じゃない」「もっと短時間で、超法規的に、強硬にやらないと、感染はとまらない」などと思ったこともおありではなかったでしょうか。あるいは、「清潔と免疫」の問題も、ある種のジレンマです。実は、毒性が強くないウイルスは私たちにとって必要なんです。我々の遺伝子の4割はウイルス感染由来だそうですよ。なにより私たちの免疫システムにとって、ウイルス感染は大事なんです。あまりに過剰に清潔を求めると、自分以外はみんな汚い、なんてメンタリティへと落ち込んでしまうことにもなります。

ほかにも、「ディスタンスとコミュニケーション」、「都市と地方」、「健康と経済」など、社会の随所にジレンマ的な構図が浮上してくる可能性がありますね。いずれも、どちらへと偏って、一方を手放す、というわけにはいきません。対立している二項を択一するのではなく、両方を常に意識し、自分の言動を鍛錬することとなります。

仏教は二項対立のワナから離脱しろと説きます。私たちは言語ゲームの世界に生きており、すぐ二項対立の図式にはまってしまうから気をつけろと言います。これを完成させたのは龍樹菩薩です。今、龍樹菩薩の教えをしっかり受け止めたいところですね。

マスクを例に挙げて考えてみましょう。私も外出時のマスク着用が徐々に習慣化してきました。それまでマスクなどほとんど身につけたことがなかったのですが……。

マスクを着けて街を歩いたり、電車に乗ったりすると、「マスクを着用していない人が気になる」という初めての感覚が生じることを自覚しました。ただ単にマスクを着けただけで、「マスクを着用している人」と「マスクを着用していない人」の構図にはまってしまう自分に驚きました。マスクを着けていない人がひどく不見識でマナー違反に見えるのです。時には激しい怒りが生じることさえあります。まさに二項対立のワナです。

私たちの脳は、二項対立で認知するのが得意なようです。脳のくせですね。よほど意識しないと二項対立構図で認識します。敵と味方、損と得、有用と無用、着マスクと非着マスクといった具合です。

この二項対立のワナに注意しないと、憎悪の連鎖が始まってしまう、結局自分で自分の首を絞めてしまうと仏教では説いています。この連鎖の方向を変えねばなりません。

今、なんだか社会が変に分断しているでしょう？　「けしからん、もっと厳しく規制しろ」と怒っている人もいれば、「ただの風邪だ。マスクするのも間違い

だ」と制限や自粛を批判している人もいます。ものすごい不安と恐怖で家を出ることもできない人もいますし、まったく気にしないで生活を変えない人もいます。ワクチンを強制すべきだという人もいれば、個人の自由だという人もいます。ワクチンは国家の陰謀だと主張する人もいる。

宗教の領域でも同じようなことが起こっています。世界的には宗教の集いは自粛されています。韓国の新天地イエス教のクラスターは厳しく非難されました。WHOも世界の宗教に向かって自粛を呼びかけました。これを機にどんどん宗教活動の縮小短縮傾向が強まり、それが2年も続いています。

一方で、ユダヤ教のハシードなど超正統派の人は、「信仰に生きろ、集会をやめるな」と、今までと変わらず集会しています。ワクチンも打たず、マスクもしないようです。ヒンドゥー教のグループにもそういう主張があるようです。聖なる牛の尿さえ飲んでいれば大丈夫という主張もあります。

日本でも某教団が「神への信仰があれば新型コロナの免疫がつく。死なない」「無宗教者は死ぬ」などと発言しているようです。

確かに宗教には、「我が身を賭して信仰に生きる」あるいは「すべてを受け入れる」というのは究極の態度としてあります。そこが宗教ならではの地平かもしれません。カミュの『ペスト』でもパヌルー神父がそのような人物として描かれていました。

日本仏教でも、良寛さんは「災難にあう時節には災難にあうがよく候。死ぬる時節には死ぬがよく候。これは災難をのがるる妙法にて候」、法然上人は「いけらば念仏の功つもり、しなば浄土へまいりなん とてもかくても、此の身には、思いわずろう事ぞなきと思いぬれば、死生ともにわずらいなし」と言い放ちました。そして、永観は「病は善知識なり」と言いました。考えてみると、病気には、治療と共に、受容という対処があります。永観さんはまさに病に価値を見出していく態度だったわけです。

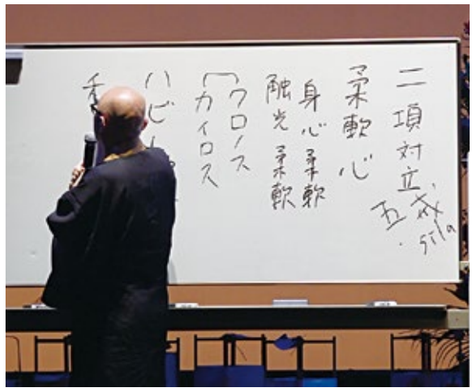
もちろん、宗教の道は、世俗の価値だけに生きるのではありません。いのちをかけて求めるものがある、それが宗教です。とはいえ、世俗と向き合うことをおろそかにしていいわけではない。信仰・信心を軸として、いかにこの世俗を生きるか、常にそこへと立ち返ることが大切で、究極の境地を表現した言葉だけを振り回すと原理主義的になります。

問題は極端に偏った思想・信条・態度でしょう。

なんであんなに極端なんですかね。どちらも意見を変えないんですよ。流行って怖いと感じれば様子を見ながら必要な自粛をする。感染がおさまってくれば活動する。その都度の見極めで判断するのが大事ですよね。

日本赤十字社では、「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！負のスパイラルを断ち切るために」と題して、「感染症の3つの顔」を警告しています。第一の感染症は病気、ウイルスの感染です。第二の感染症は不安と恐れ、そして第三の感染症は嫌悪・偏見・差別だとしています。

仏教ではすべては縁起の法則によって連鎖していくとの立場に立ちます。苦悩・憎悪・偏見・差別の方向へと連鎖していかないよう、二項対立に足元をすくわれないよう、慎重に丁寧に事態を受けとめていくのです。



今、海外ではアジアヘイトが起こったりしているようです。まさに第三の感染です。

矛盾や対立しがちな項目に直面した時、安易にどちらかに飛びついたり、わかりやすい理屈にはまったりせず、両方の項目を抱えたままで、双方の溝を少しでも埋めるような取り組みをする、それが仏教的態度だと言えるでしょう。

［2］柔軟心

赤十字の「三つの感染症」にあったように、心が不安や怖れで委縮すると、頑なになります、自分中心になり、目先のことに固執してしまいます。仏教には柔らかな心、柔軟心が説かれています。親鸞聖人も道元禅師もとても重要視された心です。

『仏説無量寿経』という経典には、四十八の仏さまの願い・誓いが出てきます。その第三十三番目は、「身心柔軟の願」、あるいは「触光柔軟の願」と呼ばれています。仏の光に触れると、身も心も柔軟になる、という教えです。身体も柔らかくなるというところが面白いですね。心が柔軟になるというのはどういうことでしょうか。それは、仏教の教えに照らされて、「ああ、自分はなんと頑なだったのだろう」と気づかされることでしょう。

我々現代人はどうしても心が委縮して固くなりがちですねよ。原因のひとつに、現代人の時間が委縮している、ということが挙げられると思います。

現代人は心身の時間が萎縮しているために、苦しくてイライラしてると思うのです。私は、ギリシャ神話から、物理的な時間をクロノス、心身の時間をカイロスと呼んで、区別しています。もともとはパウル・ティリッヒが言い出したことなのですが。

考えてみれば、昔に比べて移動時間は短縮しているし、かつてとても手間ひまかかったプロセスをすっとばすことができる。飲食にしても、火や水を使うことにしても、家電製品にしても、現代人のほうがひと昔前よりずっと時間余ってしかるべきでしょう。ところが明らかに今のほうが忙しいんですよね。ほら、お芝居観るのも、昔だと一日がかりなんですよ。観劇もずっとのんびりしていた。法事もすごく長かったです。葬送にしても、お通夜が二晩あったり、お葬式から野辺送りまで、みんなけっこうずっと付き合っていました。現代人のほうが時間余るはずなのに、忙しい。それは、いくらクロノスの時間を余らせても、カイロスの時間が萎縮してたら、忙しくて、苦しくて、イライラすることになるんですよ。人間は、長い時間の中で生きていると、少しのデコボコなど引き受けることができます。でも委縮した時間に身をおいて

いると、ちょっとしたことも許せなくなります。そうしてどんどん自分自身が苦しくなっていく。だから、いかにカイロスの時間を延ばすのかは、現代人はテーマなんです。でも、今はカイロスを縮める装置ばかり増えています。内在の時間ですね。これを延ばすのはやはり宗教です。神仏へと思いをはせる、祈る、儀式を営む、目に見えない世界へと心を延ばす、先に逝った人に心を延ばす、それらはカイロスを延ばします。おそらく人類史上もっともカイロスを延ばす装置は宗教儀礼だと思います。

［3］我々はハビトゥスの集合体

さて「仏の心を稽古する」というテーマで、「二項対立のワナ」と「柔軟心」のお話をしました。いずれも「日常生活において実践されることで、次第に身心に染み込んでいく」という点では、まさにお稽古といったものでしょう。仏教は、私という存在は身心の営みによって刻々と変化しながら形成されていると考えます。これを現代思想の用語で、「私という存在はハビトゥスによって形成されている」と表現してみたいと思います。ハビトゥスは習慣と訳されがちですが、もっと多義的な言葉です。社会学者のピエール・ブルデューによると、ハビトゥスとは反復されることによって身に沁みこんだ能力です。＜私＞はハビトゥスによって編み上げられた存在であり、それゆえに独自性を獲得します。そしてそのハビトゥスを調える知恵が仏教には膨大にあります。たとえば、「五戒」の原語は、パンチャ・シーラですが、シーラは「習慣づける」という意味になります。ジャイナ教にも「五戒」がありますが、こちらはパンチャ・ヴラタです。仏教の「戒」のとらえ方は独特のものがあります。これもお稽古ですね。

そして、私たち仏教者が目指す稽古の方向性は、「自分を大切にすることは、他者・世界を大切にすることへとつながる」というものです。

『華厳経』には次のように説かれています。

「一切の世界海は、世界海の塵の数の因縁に有りて具わるが故に成ず。（中略）一一の微塵の中に、仏国海が安住し、仏雲が遍く護念し、弥綸して一切を覆う」（『大正大蔵経』「華厳部」上9-409-410）

個別に見える現象や存在は、決して無関係ではなく、結ばれて相互依存で成立している。これを法界縁起と呼びます。

自分を大切にすることが、他者へ世界を大切にすることへとつながる、そのように考えることもできるでしょう。自分と同じように他者や環境を大切に。「私にいい」が「あなたにいい」・「世界にいい」へとつながる営みを考えて行きましょう。

たとえば、日常の消費活動だって、よりよいハビトゥスへと方向づけることができることでしょう。エシカルな消費という視点が大切です。できるだけ環境に良い商品を購入する、できるだけ良い活動をしている企業の品物を購入する、良い活動している団体を応援する、といった活動を心がけるのはいかがでしょうか。

あるいは、もっと身近なことで言えば、穏やかな態度と慈しみの言葉を語る「和顔愛語」（『無量寿経』）の教えから始めるのも良いと思います。道元禅師も「愛語」の大切さを強調しておられます。

考えてみれば、新型コロナ以前の世界がとても良かったわけでもありません。社会のスピードが速すぎて、いろいろ見えなくなっていました。スピードが落ちて、浮かび上がってきたものもあります。

とにかくこの一瞬を変えれば、次の瞬間が変わります。それが仏教の立場です。

新型コロナで世界は変わろうとしています。どうせならより良い世界へと変わるようつとめていきましょう。世界は情報を共有し、協力し合って、暮らしやすい社会を目指しましょう。

［まとめ］

東日本大震災の時は、「宗教に何ができるのか」といったシンポジウムが行われていたが、今回はそういう動きは鈍い。ある意味「何もできない」感を抱えています。しかし、ここから始まる。まさに哲学者の久松真一が言う「何もできないと分かった時、何をするのか」です。コロナを通じて公案が突きつけられているような事態であると言えるでしょう。

感染症はすべての人が当事者です。海外では貧困層に感染が拡大しているといったニュースが何度も報道されていましたが、結局それは富裕層への感染へとつながっていくわけです。ワクチンだって、世界に分配しないと、どこかの地域で感染がひどくなれば、結局自分のところへとつながってくるわけです。世界のどこかが苦しんでいる限り、どこの国も安全ではない。それが感染症問題です。

いろいろ申しましたが、最後にもう一度お伝えしますと、仏法と出逢って、「あ、自分の心は頑なだな」と気づいていく、その繰り返しです。

つい心が委縮して、自己中心的になり、二項対立の単純な理屈に飛びついてしまう私。そこを、仏法を通じて見つめて行く。柔軟心の教えに耳を傾けていただければと思います。感染症によって、自分のことを考えるのは、他者のことを考えることであるというのがはっきりしたとも言えます。ご苦労も多いのはよく存じていますが、私たちの暮らしをよくよく見つめ直す機会でもあります。仏教が説くように、言葉や情報のワナにはまらないよう、どう隙間をうめていくか、という工夫をしていっていただきたいと思います。自分の足元を見直す契機にしていきましょう。

大会宣言

本日、全日本仏教会会長 浄土真宗本願寺派大谷光淳御門主をお迎えし、「『異文化理解と共存』～仏の心を稽古する～」を主題として島根大会を開催しました。

現下は世界中が新型コロナウィルス感染症の蔓延による未曾有の混乱の真っ只中にあり、これまで陰に隠れていた異文化、異宗教、異人種への謂われなき偏見と差別が拡大し、自国主義・利己主義が頭をもたげ、弱者は虐げられ、人々の平安な生活が奪われ、平和が壊れようとしています。

私たち島根県の仏教徒は、国の内外を問わず争いの止まないこの現世の様相を憂い、世界の平和と安寧な社会の実現を願って今回の主題を掲げました。

島根県は、日本中で知られる出雲大社をはじめ多くの名を知られた神社があります。しかし、県内には神社とほぼ同数の寺院が存在し、神仏が互いの違いを認め合いながら共存し、助け合っています。

よって、本大会では古代より郷土の風土と歴史が醸成してきた「和」による異文化理解と共存のすがたを認知いただくと共に、世界の平和を実現するための実践として、多様性を受けとめ、受け容れ、認め合い、お釈迦様のみ教え「ゆるしあう心」「ゆずりあう心」「慈しみあう心」を日々の稽古として生活することの大切さを学びました。

今、第45回全日本仏教徒会議島根大会閉会にあたり、次のことを宣言します。

〈大会宣言〉

我々仏教徒は釈尊のみ教えを守り、常に「ゆるしあう心」「互いにゆずりあう心」「慈しみあう心」を稽古し、地域の平安、世界の平和を求め「己を忘れ、他を利す」生活を続けることを誓います。

令和３年10月２日

第45回全日本仏教徒会議島根大会

「慈悲の鐘」を撞こう!!

島根大会開催趣旨「世界平和を願う」「仏の心を稽古する」を実践しましょう。

世界各地の紛争・差別・不寛容・貧困等により苦しむ人々、社会から孤立し、生きる力を失った人々、多発する自然大災害で被災した人々等に寄り添い、また、新型コロナウイルス感染症に係わる行政関係者、医療従事者への感謝・激励をこころに込めて…。

島根県内から日本全国へ、そして世界へ響き渡れ。

県内寺院内の梵鐘・半鐘・磬子等を同日同時刻に鳴鐘します

釈尊の「四無量」の教えを表明し鳴鐘発信

- 「慈」 他者の幸福を願う心
- 「悲」 他者を不幸から救い出す心
- 「喜」 他者の幸福を見て満足すること
- 「捨」 他者を差別しないこと

期間：令和2年12月～令和3年10月（毎月1日）／時刻：12時00分（正午　基本時刻）

開催百日前法要

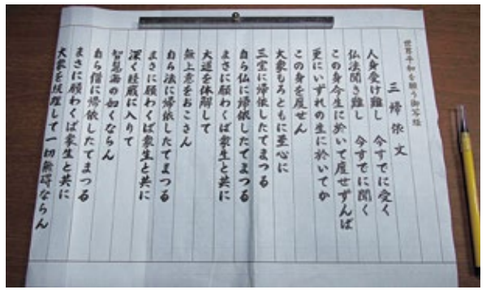
6月24日、安来市清水寺にて各宗派より約20人の僧侶が出勤し、大会円成を願って厳修しました。全日本仏教会からも４人がはるばる駆けつけました。

梅雨の晴れ間のもと、「慈悲の鐘」鳴鐘の後、色とりどりの各宗派の法衣をまとった僧侶が、光明閣から根本堂までお練りをしました。そして根本堂内陣にて天台宗の法式にて法要が行われました。コロナ禍の状況は不透明ながらも、開催に向けての意欲を高めることができました。

「世界平和を願う」写経の輪をひろげよう！！

島根大会開催趣旨「世界平和を願う」「仏の心を稽古する」の実践として、世界の恒久平和と毎年多発する自然災害の被災地復興を願い、また、あらゆる偏見や差別をしないこと、多様性を皆が認め合い、お互いに力を合わせあう社会の実現を祈り願い、心を込めて写経しました。

そして、大会当日には、県内各地の寺院から呼びかけて頂いて浄写された約1200巻を舞台にお供えし、「世界平和を願う法要」で『三帰依文（和訓）』を唱和します。



世界平和を願う「リレー行脚」

当初の計画では、前回開催地・福島から京都へタスキを送って頂き、西本願寺から島根県民会館まで約330kmは、10日間リレーしてタスキを運ぶ予定でありました。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、最終的には、福島・金剛寺にて出発セレモニー及び京都・西本願寺にてのセレモニーを行った後、受け取ったタスキを島根県仏教会会員が、自坊の周辺を２週間掛けて行脚ウォークを行い、最終的に、そのタスキを県民会館に飾り、リレー行脚実行の証とします。

※仏教体験コーナー・島根の文化体験コーナー

BUDDHIST GOEN cafe（精進料理）、座禅体験、写経体験、数珠ブレスレット、仏様塗り絵、出雲神仏霊場お砂踏み、出雲ぜんざい、茶席、しめ縄作り体験等を、各宗派青年会が用意して楽しんで頂く予定でしたが、やむなく中止としました。

基調講演 令和3年12月3日（金）増上寺 圓光大師堂

異文化交流の事跡を訪ねる
―立正大学ウズベキスタン学術調査隊報告―

立正大学名誉教授
安田 治樹 氏

ウズベキスタンの南部からアフガニスタン北部にかけてのバクトリアは、ヘレニズムやインド、イランの文化の混淆する、「文明の十字路」として知られます。紀元の前後頃までに波及した仏教は、その後クシャーン時代にかけて盛んな造形活動の跡を遺します。立正大学は、2014年以来、ウズベク南部のカラ・テペ遺跡を中心に、仏教東漸の様相とその間の変容を尋ね、歴史・考古学的調査を行なってきました。本講演ではこの混成文化圏における特異な仏教遺跡のいくつかを紹介し、併せて調査の成果の一端を報告します。

立正大学は、2014年から2019年にかけて中央アジアのウズベキスタン共和国南部のスルハンダリヤ州の州都テルメズにおいて、その西郊に位置する仏教の重要遺跡カラ・テペ伽藍址の考古学的調査を実施した。目的は、インド、イランの文化が混成する当該地域における紀元前後数世紀の間の、なお不明な仏教及び仏教文化の受容とその展開、変容の過程を跡づけ、あらためてユーラシア内部への仏教の伝播と、それに関わる歴史の諸相の一端を明らかにしようとすることにあった。以下、その報告を中心に、当該地域における仏教文化の諸相について眺める。

ウズベキスタンの南部、アムダリヤを挟んで南にアフガニスタンを望む地域は一般に北部「バクトリア・トハリスタン」と呼ばれ、歴史的にはイランのアケメネス朝に属した前6世紀以降、セレウコス朝やグレコ・バクトリア王国の領域となり、後1世紀後半から3世紀前半にかけては強大なクシャーン朝の勢力下におかれた。仏教はこのクシャーン朝治下の西北インドで大いに隆盛をみてガンダーラ美術が盛え、当地域もひろくこのガンダーラ文化圏に属した。

他方、前2世紀後半の頃から古代内陸アジアを東西に結ぶ通商幹線路「シルクロード」が賑わい、これから分かれて東南方のインドへと延びる支線がこの地域を経由したことから、ここに東の漢、西のローマ、パルティア、南のインドのサータヴァーハナ朝の諸文化が集聚する、いわゆる「文明の十字路」を形成することとなった。すなわちアケメネス朝以来のイラン文化の基盤の上に、アレクサンドロス大王のもたらしたヘレニズム文化と、その後波及をみたインドからの仏教、さらに後代に至ってはイスラームの影響が及び、この地域においてそれらが重層的かつ複雑に絡み合う特異な文化を育んだ。

これらの地域における歴史文化遺産の調査は、20世紀初頭以来、旧ソ連が主導したが、そのうち仏教遺跡として知られるものは中央アジア全体で今日27ヶ所余を数える。キルギス共和国では、近年、7世紀初頭に玄奘が入竺の途次訪れた西突厥葉護可汗の王庭に比定されるアク・ベシム遺跡や、周辺のクラスナヤ・レーチカに仏寺址の存在を明らかにし、タジキスタンでは、クルガン・チュベ東郊の7～8世紀の仏教伽藍址アジナ・テペで四方斗出形のストゥーパ（仏塔）遺址や12m余の塑造涅槃像が見出された。またトルクメニスタンのメルヴ、かつてのマルギアナでは、都城ギャウル・カラの城壁内外にストゥーパと僧院からなる仏寺址が遺り、ストゥーパからはガンダーラ様式の仏像や、白樺樹皮に記したサンスクリット語写本を収める彩画壺が出土した。同寺は伴出の貨幣から4～6世紀頃の経営とみられ、また最近龍谷大学によって近郊に仏教石窟の存在が報告されており、何れにせよトルクメニスタンで確認されるこれらの仏教遺跡が、現在知られる仏教伝播の西限を示す。

考古学者タマラ・ゼイマリは、中央アジア全体の観点から、これら北部トハリスタンの仏教遺跡を2～4世紀のクシャーン期と7～8世紀の中世初期の、大きく2期に区分けした。ウズベキスタンにおいて、クシャーン期に属すのは、スルハンダリヤ州の州都テルメズ周辺のファヤズ・テペとカラ・テペの仏教伽藍址、仏塔址ズルマラ、さらに都城址アイルタムとダルヴェルジン・テペに遺された仏寺址などであり、中世初期の仏教遺跡としては北部フェルガナのクワ（クヴァ）が、これにあたる。

テルメズは、古来アム・ダリヤの重要な渡河地点の一つであった城砦都市で、当初の古テルメズは現テルメズ市の西南に位置する。グレコ・バクトリア時代（前3～前2世紀）からその名が知られ、クシャーン朝時代（1～3世紀中頃）には仏教の一中心をなし、周辺に仏教遺跡が多い。

【ファヤーズ・テペ】

古テルメズの西郊、1968年に見出された仏教伽藍址ファヤーズ・テペは、木柱の列柱廊（ポルティコ）を付した内庭のある中央僧院の南北に講堂・食堂を連接する矩形の僧院と、この東側を占めて立つ小型のストゥーパからなる。上部構築物を失うが、この地域特有のパフサ（粘土ブロック）と日干煉瓦積の墻壁基部を残し、東西に仏塔区と僧院区を劃然と分けるインド以来の伽藍形式の踏襲を明らかにした。

中央僧院の一室からは仏立像やクシャーン風世俗人物群像、バクトリア語銘記「ファッロ」（イランの光輝フワルナの神格化）を伴う神像などの壁画残欠が見出され、バクトリア・トハリスタンのクシャーン期の貴重な絵画資料を提供した。同室からは、樹下に二比丘を従えた禅定相のブッダ坐像をあらわす石灰岩造三尊像龕（図1）も出土しており、同像はガンダーラ様式の影響を被るものの、石材が当地域産出の石灰岩であること、顔貌表現が時に「オクサス派」と呼ぶローカルな作風になることなどから、バクトリア・トハリスタン固有の造形基盤に立つものとみなされた。彫刻のこうした特徴は、近郊のカラ・テペやズルマラ、アイルタム出土の彫像類にも共通し、さらに

図1

相似た表現が、距離を隔てたガンダーラの北、スワート渓谷出土の彫刻に見出されることは、葱嶺を通うバダフシャンーワハン路を経由しての相互の交渉や影響関係を予想させる。

発掘者はこの伽藍の創建年代を前1世紀頃と想定し、出土陶片が記す文字資料や伴出の貨幣から、その活動期間を後3世紀前半頃までとみなしており、カラ・テペなどと同じく4世紀初頭のサーサーン朝侵入頃には衰退に向かい、エフタル支配下の5世紀頃には活動を停止したらしい。

【カラ・テペ】

ファヤーズ・テペの南西約1kmを隔てた砂岩層の台地(カラ・テペ、「黒い丘」)の北・南・西の3丘に、僧院とストゥーパからなるコンプレックス(建築複合体)を築く総面積8haに及ぶ仏教伽藍址（図2)。1928年に初期調査、1961～1998年に断続的調査が行われ、1998年からは科学アカデミー芸術学研究所と故加藤九祚氏による共同調査が始まり、2014年度から5カ年は加藤氏を顧問とする「立正大学ウズベキスタン学術調査隊」が発掘調査を実施、2020年3月に報告書『カラ・テペ テルメズの仏教遺跡』を公刊した。

南丘・西丘の伽藍は、山腹に穿った祠洞をトンネル状通路・階段で連絡する10余の石窟と、その入口前面の日干煉瓦積地上僧院とを組み合わせた特異な複合形式で、地上僧院は一部にイラン系建築に多用されるイワーンと呼ぶ前面に壁のない開放的な広間からなる内庭をそなえる。北丘伽藍は北側の方形基壇（16×15m)に建つストゥーパ(残存高3.8m)と、これに隣接した大型の僧院（45×50m）からなり、ファヤーズ・テペと同じく仏塔区と僧院区を明瞭に分けたインド以来の伽藍形式を示す。僧院中央に広間にあたる広い空間を設け、三方に房室（西側は不明）を具えるプランもインド以来の形制に従うが、パフサと日干煉瓦による構築法や、イワーンをはじめドームやスキンチ・アーチなどに西アジア的要素が顕著である。

出土土器片中に寄進者の名を記す墨書銘記300件余が認められ、西北インドで行われたカローシュティー文字、インドのブラーフミー文字の他、当地域固有のバクトリア語銘記が見出された。銘記の中には、「カーデヴァカ・ヴィハーラ Khadevaka-vihāra」、すなわち「王の僧院」なる語がしばしば登場し、「王」名は不明ながら、当伽藍とクシャーン王朝との結びつきの強さをうかがわせた。カローシュティー銘には「Mahāsanghika（大衆部)」を記すものもあり、この伽藍が部派の大衆部に属したらしいことなど、当時この地域に流通した仏教の思想内容を知る貴重な資料を提供する。

遺跡からはクシャーン期及びクシャーノ・ササン期にかかる銅貨が出土し、これら貨幣の編年により、伽藍の経営年代に関してはクシャーン期を中心とする概ね2～4世紀頃に措定されてきた。今回立正大学調査隊は、北丘の日干煉瓦中から採集した動物骨片及び人骨を試料として放射性炭素による年代測定を行った。採集箇所や試料によりデータに出入はあるが、結果は2世紀前半にはすでに伽藍の一部が建設され、4世紀頃には衰退に向かい、6世紀に復興を兆すものの、それも玄奘が通過する7世紀初葉頃にはすでに大方の活動を停止していたらしいとする、従来の編年をおよそ裏づけた。

カラ・テペの建築はアッティカ式柱礎等のギリシア的要素と、パフサや日干煉瓦、イワーンに代表されるイラン的要素とが混淆したバクトリアの地方的要素が濃く、石灰岩を材とする石彫像もアイルタムやズルマラ出土の彫像断片と共通する特有のローカルな「オクサス派」の様式を伝える。ただ、彫刻にはクシャーン風衣装の塑造人物像などローカルな表現と、ハッダの塑像の系譜に連なる整った表現の二様があり、これら異なる二つの様式は壁画にも認められるところ、それら様式の差異が製作年代の時間差に起因するものかどうかなど、今後なお詳しい考察が求められる。

当遺跡出土の壁画は、従来南丘、北丘に残欠が知られたが、2017年の調査で北丘の大ストーパ西の小祠堂No.52、No.56内にも鮮明な壁画の残存が確認され、一躍注目された。No.52の壁画の2人物像は、ファヤーズ・テペの神像ファッロに擬される像と表現手法が近いが、隣接するNo.56の壁画の詳細は不明ながら、仏

図2

図3

図4

伝図または本生図等の大きな構図の一部と推知される（図3）。人物顔部の肥痩のない褐色の輪郭線や杏仁形の眼と大きな瞳、眼窩や鼻梁に施された強い暈取り、朱やラピスラズリーの青を用いた鮮烈な色彩が描写手法上の特徴であり、No.56の床堆積中から採取された人物像の顔部残欠では、とくに鼻梁のハイライトや濃彩の暈取りが注目され、ことにグレコ・ローマ美術に淵源する強い濃淡の諧調による立体感の表出技法キアロ・スクーロchiaro-scuroと、仰視する眼差しが特筆される。様式的には西域南道のミーラン第5寺址、第3寺址からA. スタインが将来した有翼天使像（図4）など（ニューデリー国立博物館蔵）と対比され、また素材は異なるものの、楼蘭の古墓C発見の毛織綴錦のヘルメス像残欠にも通ずることが指摘される。

本遺跡の壁画は今後発掘の継続により、より完好な例の発見が期待されるが、それらは6世紀後半から7世紀前半頃のバーミヤーン石窟壁画以前の、バクトリアや西アジアに展開した絵画と東トルキスタンに行われた絵画との影響関係の解明に重要な資料となる。

【ダルヴェルジン・テペ】

同遺跡は前3世紀から後7世紀に及ぶこの地方最大規模（南北約1km、東西約0.5km）の都城址で、1960年代から発掘が行われ、グレコ・バクトリア時代以降クシャーン時代にかかる時代層のうち、クシャーン早期の層からハルチャヤン神殿址に続く塑像断片等が多数出土した。城壁内外の2ヶ所に仏寺址が確認され、城壁外の第1寺址（DT-1）では、ストゥーパを囲む日干煉瓦積建物の部屋から「ガンチ（石膏）」と呼ぶ漆喰を厚く施した塑造仏像断片や尖がり帽子を被る王侯像頭部、男女供養者像、守護神像頭部などが出土した。何れもヘレニスティックな表現のクシャーン朝早期の2～3世紀頃の作と推定され、とくに目鼻立ちが整って若々しい尖がり帽子の王侯像（図5）は、ファヤーズ・テペ出土の仏三尊像龕と並び、北部バクトリアートハリスタンの造像を代表する作柄を示す。城壁内第2寺址（DT-25）出土の彩色塑像残欠は、瞑想風の螺髪ある仏陀像頭部、波状の頭髪と豊富な装身具をまとう菩薩像ともに塑像としては体軀の量感や四肢の自然な動きなどに技法の習熟が認められ、アフガニスタンのハッダに連なる塑像の系譜をうかがわせる。ただ型押しの装身具の小花意匠や煩瑣な衣褶など、その細部の表現は異なり、当地での地方化が看取され、第2仏寺址出土像は、第1仏教寺院址出土像とは様式を異にして4～5世紀頃まで下る可能性がある。

図5

【ズルマラ】

テルメズ西郊のズルマラ塔址（図6）は、1926～28年の初調査の後、戦前にM.E.マッソンが再調査し、戦後1964年のG.A.プガチェンコワの調査により当初の規模が推定された（塔体は120万個の日干煉瓦積み、当初総高は16m、基壇は22×16m、現在は直径14.5、高13m）。その後目立った調査はなく、現況は綿花栽培の灌漑に起因する水分含浸がもたらす日干煉瓦の脆弱化と季節風による風蝕で、大きな亀裂を生じ、ほとんど崩壊寸前の状態にある。立正大学調査隊は2017年度から温湿度・降雨量等保全に関わる環境調査を開始し、レーダー地下探査とレーザーによる高精度測量、ドローン撮影を行うなど、将来の保全修復に備え必要なデータの集積に努め、2021年3月にはこれまでのデータに基づく塔損壊のメカニズムや遺跡保存の専門家からの提言を含むズルマラ仏塔の調査結果を『ウズベキスタンにおける仏教文化遺産の調査と保護』として刊行した。

図6

以上、ウズベキスタン、スルハンダリヤ州の仏教遺跡についてカラ・テペを中心に要約的に紹介した。遺跡や出土品一々の「異文化交流」の詳細は必ずしも明らかではないが、建築の材質や形式、彫刻、絵画等の表現様式に、インド本土はもとより近接するガンダーラやアフガニスタンのカピシーなどとも異なってイラン的要素が色濃く、バクトリア・トハリスタン特有のローカル色豊かな造形感覚をうかがわせる。それこそがまさしくインド・イランの文化の混成するこの地域の文化的特質と言い得る。

なお、文中に掲げた挿図のうち図4は『世界美術大全集 東洋編　第15巻　中央アジア』小学館、1999年、より転載、他は立正大学ウズベキスタン学術調査隊の提供による。

パネルディスカッション　令和３年12月１日（水）増上寺 圓光大師堂

「異文化交流の歴史から共生の知恵を学ぶ」

本紀要の文章は、12月1日に行われたシンポジウムの内容を、それぞれの先生方が再構成されたものです。

島根大会シンポジウムを振り返って

東京大学教授・日本印度学仏教学会理事長
下田正弘

昨（令和3）年の暮れ、全日本仏教徒会議島根大会で開催されたシンポジウムのテーマは「異文化理解と共存」だった。これがいかに切実で重要なものであったか、いま鮮烈に迫ってくる。軍事大国ロシアが隣国ウクライナを武力で侵攻し、自国の支配下に置こうとする。平穏な日常を一夜にして破壊し、無辜のひとびとのいのちを奪って顧みるところがない。他国の存在そのものを抹殺せんとする暴挙を前にして、世界は凍りついている。

＊＊＊＊＊

平穏な平時には、自己意識はどこかに潜伏していて自覚されることがない。ところがみずからの行く手を遮る障害が現れると、それを斥けようとする抵抗力がたちまちに内に生じ、気がつけばそこに自我が現れている。それは反省力をもった理性的な意識である以上に、目のまえの障害を斥けようとする、盲目的な力として起きている。ことにその障害が人によってもたらされていることがわかると、それは怒りの感情へと化し、言論で治まらなければ武力をもって相手の存在を消し去ろうとする。

＊＊＊＊＊

危機に直面して現れた自我が、個人にとどまらずして、共同体や社会という次元に拡張されるとき、歴史や言語や民族など、それまでは緩やかにしか結びついていなかった共同体の理念が前面に呼び出され、社会としての自己を保存するための必須な正義となり、絶対化されてゆく。このとき自我の力は飛躍的に拡大されるとともに、個人を共同体の犠牲にする大義が確立する。自身が所属する集団や国家を守るために個を犠牲にする「愛国心」までは、ひとは情緒に任せて自然に高まってゆくことができる。過去の歴史が、そして現在の世情が歴然と証明する通りである。

＊＊＊＊＊

この「自己犠牲」は、実は他者を否定して自己を保存せんとする欲求が、社会や共同体という次元において、姿を変じて現れたものにほかならない。つまり、ことの経緯は、自己を保存せんとする盲目的な力が、翻って自己を滅ぼす力となって還ってくるという、壮大な逆説である。

正義は諸理念のなかで最も高邁なもののひとつである。だがそれは、他を許容せずして斥ける力を理性的に支える根拠となり、転じて自己を否定する理論的根拠となる。敵味方の区別なく、自他がともに平等に生かされる道は、正義を超えなければ実現しえない。

＊＊＊＊＊

シンポジウムの最後にテーマとされた主題は、仏の成道の場面が意味するところであった。釈尊は降魔成道の最後の瞬間、自身のさとりの真正性の証明を、触地印をもって大地の女神に尋ねた。有史以来この大地は、義人、罪人、善悪、浄穢、あらゆる相対差別を超え、すべてのいのちを平等に受け入れてきた。異文化理解と共生が成り立つのは、この絶対平等の地平においてである。その大地から誕生した「和を以って貴となす」との『憲法十七條』第一条。この意義を、まさにいま実現することが、日本の仏教界に切実に求められている。

異文化共存で疫病と気候変動を生き延びた歴史

兵庫県立大学名誉教授・身延山大学客員教授
岡田真水

はじめに

全日本仏教徒会議島根大会のテーマ「異文化理解と共存～仏の心を稽古する」について、異文化共存で疫病と気候変動を生き延びた歴史をとりあげて考えてみる。

まず、私の考える「仏の心」とは、法華経の釈迦牟尼仏の本誓願：＜皆が仏になる＞である。パンデミックの現代こそ、闘争によって勝ち残るより、この＜仏の慈悲の心＞を稽古することによって異文化を理解し、みな共に生き延びる道を選ばなければならない。

なぜなら、我々の歴史は、かつて新しい仏教、異文化の人々を受容し、これと共存することによって気候変動と疫癘の世を生き抜いた経験を持っているからである。例えばそれは紀元前後、3－6世紀、8世紀、13－14世紀と人類史上何度も起こったことであった。

1．紀元前１世紀頃の大旱魃時代

「生類が減ったのを見て集まった托鉢修行者たちは、教えを久しく存続させるために［三蔵の本文とその注釈を］写本に書かせた」（『島史』『大史』）。スリランカで仏典の最古の写本がつくられたのは、Beminitiya Seyaと呼ばれる大旱魃時代であったと伝えられる。この時、書写して文化を伝えるという西からの新技術によって、人々は大旱魃・大飢饉・疫病の損失を乗り越えた。そしてテクスト化された教説、大乗仏典が出現したのは、まさにこの紀元前後であった。［cf.馬場紀寿 2018『初期仏教』;下田正弘 2013「初期大乗経典のあらたな理解に向けて］

2．3－6世紀の古墳寒冷期

3世紀半ばから厳しい寒冷乾燥時代が始まった。「古墳寒冷期」と名付けられているが日本だけでなく、世界的な大気候変動時代でフン族やゲルマン人の大移

動があり中国では五胡十六国時代であった。

この時代に日本に残された土木遺構がある。それが古墳とため池である。最初の巨大古墳といわれる3世紀の箸墓古墳の周囲は、現在すべて民有地と桜井市市道である。古墳に接している箸中大池も水源として地区共有の財産になっている。このように、墳墓は大王や首長らのものでもその周りはため池として民が使うという構図は古墳築造時から存在していた、と考えることはなかなかに魅力的である。

また、これらの大土木工事は渡来人のもたらした異文化先端技術によって作られた。寒冷化によって朝鮮半島を南下し、日本にやってきた渡来人たちは新しい信仰ももたらした。製鉄、農業土木、治水に秀でた秦氏は当時朝鮮半島で盛んになっていた弥勒信仰をもっていたらしい。こうして人々は古くから先端の科学技術と精神文化を受け入れたてきたのである。[cf.阪口豊（1995）「過去1万3000年間の気候の変化と人間の歴史」; 岡田真美子（2012）「現場が語る宗教的感性～古墳というフィールドで」]

3. 天平の災異と仏教

天平四年(732)年夏 干魃、秋 凶作に続き、翌年は飢饉 疫病が流行し、さらに734年には畿内七道地震に見舞われ、聖武天皇はそれまでの儒教に基づいていた政策方針を、仏教中心へと転換した。

恐るべき疫病「豌豆瘡」が猛威を振るった737年には、仏教国家という新しい国家指針に基づき、大極殿において「金光明最勝王經講説」が行われ、そのあと疫病は急速に沈静化した。新伝来の経典には病理や薬学の新知識も含まれていた。

おわりに

こうして気候変動、自然災害、疫病などの環境危機を、人々は異文化の排除・権力集中、戦いではなく、新思想、新技術、協力で克服してきたのである。困難な時代にこそ仏たちの説く「修善」、だれ一人残さないという慈悲の心が求められている。

以上がパネルディスカッション「異文化交流の歴史から共生の知恵を学ぶ」において私が行ったショートレクチャーであった。

出家である私が属す日蓮宗は、曼荼羅（本尊）に天照大神と八幡大菩薩が記されている。本大会会長である清水谷善圭島根県仏教会会長がおっしゃった「神と仏が共生している地域」である島根であったはずのパネルディスカッションでもう少し神についても触れたいと思いながら果たせなかったことが心残りなので、ここで、少しだけ神についても触れておきたい。

神は外来

カミはタミにとってヨソ者だという。八幡神は韓渡りだと言われる。天照大神の弟で、出雲で大活躍した素戔嗚尊は、朝鮮半島と日本を行き来した。神武天皇の曾祖父、瓊瓊杵尊は天照大神の孫神であって高天原なる天の国から降臨した。神功皇后の母方先祖、天之日矛は国土開発の神として出石神社に祀られているが、元は朝鮮半島の新羅の皇子であった。

神功皇后の息子、応神天皇は大陸の文化と産業を輸入、新しい国づくりをされたと伝えられている。ヨソ者の子孫は異文化交流に長けていたらしい。このように日本は、カミもタミも盛んに異文化の他国と交流をしてきた。歴史を見ると、異文化交流・多文化共生はむしろ昔の方が盛んであったように見える。日本民族なる純血種などなく、日本文化は多様性の上に成り立っている。

「真理は一つ、それに至る道はいろいろ」—なのか？

異文化交流の際に、道は様々であるが、同じピークを目指している、と語られることが多い。これに対し、パネリストのケネス田中氏は、それは違うのではないか、と述べられた。彼の示したモデルは大変興味深い。曰く、真理は、同じ山脈にある様々なピークである、と。世界には色々に異なる真理があることを認めようと言うのである。

対話の大切さ

異なっているからこそ師茂樹氏のいう対話が重要になってくる。ピークＡとピークＢとピークＣのうちどれが真理か、ではなく、ＡもＢもＣもみな同じなのでもなく、Ａ、Ｂ、Ｃはいずれもが真理である、という世界でお互いを理解するためには、対話することが不可欠である。対話（問答）は師氏のいうごとく、古来より仏教が重んじてきたことであった。

対話は、違和感や異論をはっきりと示すことで考察が前進すると言われる（納富信留2020『対話の技法』）。違和感や違いを明らかにすることは、一方で対立が生じ、怒りなどのマイナス感情が起こるという危険を伴う。しかし、違いに目を向け問答が始まり、言葉を交わすうちに、かえって一体感が醸成されることもある。お互いの真理に対して言葉を投げ合うことで新しい考えが生まれ、今のあり方を超えることも不可能ではない。

異文化の両者が互いの違いに目を向け、対話するうちに生まれた新しい知恵は、対話する二人から離れて自立した、新たな生命を持って生きていく言葉で、とりわけ書き残され、読み継がれることで、普遍性を手に入れ永遠の命を宿すという（納富 ibid）。これこそ異文化交流の醍醐味であろう。

證明する者

仏典の書写に関して興味深い論考を発表してこられたコーディネータの下田正弘氏は、このパネルディスカッションを最後にみごとにまとめられた。その内容はこの紀要に氏が寄せられる文章に譲りたい。

下田氏は最後に、ひとつの仏伝文学にあるひとつの逸話を語られた。－釈尊がなした善行を証明するものは誰もいないという悪魔に対して釈尊はこう言う：一切衆生を支える大地が証人である。そして大地に触れられたとき、大地は揺れて釈尊の正しさを証明した。

この大地のごとく、また法華経における多寶如来のごとく、下田氏はそのまとめの言葉によって、パネルディスカッションが実り多いものであったことを証明してくださった。

感謝してここに記して擱筆する。

異文化対話を稽（かんが）える

花園大学教授
師　茂樹

はじめに

今回の大会テーマ「仏の心を稽古する」の稽古という言葉には、「古」という言葉が入っている。仏教徒・非仏教徒にかかわらず、仏教という古代から連綿と受け継がれてきた智慧に学ぶという態度が、今の私たちには求められているのではないかと思う。

私はこれまで東アジア仏教における論争について研究をしてきた。そのなかで、仏教徒が重ねてきた問答の伝統から多くのことを学ぶことができるのではないか、と思うようになった。

東アジア、特に日本仏教の特徴として、神道、儒教、道教、キリスト教といった仏教外の様々な宗教との共存、対話をしてきた、ということがあるかと思う。仏教の内部でも、八宗、十三宗といった具合に、様々な思想、考え方、修行や救済の方法が併存し、問答や対話をしてきた伝統がある。

異なる考え方、信念を持った人々が併存し対話をすることができたのはなぜか。異文化の対話が求められている現代においてこそ、日本仏教をはじめとする伝統のなかで蓄積されてきた問答や対話の智慧を活かせるのではないかと思っている。

1．宗教間対話の四類型

異文化の対話といっても、様々なパターンがある。ここでは、宗教学のなかで、宗教間対話を三つ（排他主義、包括主義、多元主義）ないし四つ（多元主義をさらに二つに分けたもの）に分類しているのを簡単に紹介しながら、仏教における対話について整理しておきたい（小原克博2007「宗教多元主義モデルに対する批判的考察：「排他主義」と「包括主義」の再考」『基督教研究』69-2に基づく）。

この分類は、様々な宗教があっても真理や救済（宗教的なゴール）を一つであると考えるか、一つではないと考えるかで、大きく二つに分けられる。後に見る多元主義②を除くと、前者の考え方になる。

① 排他主義

排他主義は、自分以外の宗教を認めない、という考え方である。真理・救済は一つしかなく、自分の宗教以外ではそこに至ることができない、と考える。真理・救済を山の頂上にたとえるならば、排他主義は、自分たちの山道（宗教）でなければ頂上にはたどり着かない、というのに似ている。

排他主義は、最近では評判の悪い考え方である。しかし、何が“正しい”宗教で、どのような考え方が“間違っている”のか、ということをきちんと考えよう、という態度としては、一概に否定すべきではないとも言える。

② 包括主義

他の宗教にも真理や救済に至る契機や方法も含まれるが、自分の宗教こそが完全なものであり、宗教全体を包み込むような存在である、と考えるのが包括主義になる。先ほどの山頂のたとえを使えば、山頂に向かう入り口は複数あるけれども、最終的に山頂にたどり着くときには自分たちの山道（宗教）だけになる、という考え方である。

東アジア仏教で展開した教相判釈は、多くがこの考え方だと思う。教相判釈は、自分が信じている教義などを完全な教えとして位置づけ、多様な仏教全体を捉えようというものである。相互に内容の異なる仏典や、異なる信念に基づく諸文化を受け入れようとしたときに、東アジアの仏教徒が見出した一つの智慧だと思う。

自分の宗教こそ最高だと考えるのは、自文化中心主義的であり、批判される面もあるかもしれない。一方で私たちは、そんなに簡単に、他人、他宗教の立場に立つことはできない。自分（私）というものから脱して平等にものを見ることができる、というのは、それこそブッダの境地（平等性智）であって、なかなかできるものではない。その意味で包括主義は、凡夫である私たちが宗教間対話、異文化理解を考える上での基本形なのかもしれない。

③ 多元主義①

これは、最終的にたどりつく真理・救済は一つだけれども、そこに至る道（宗教）は複数あり、宗教間に優劣はない、という考え方である。山頂は一つだけれど、そこに至る山道は複数あるし、どのルートをとってもかまわない、ということだ。

日本の古代・中世などで確立した八宗体制（南都六宗＋天台宗・真言宗）などは、八宗以外は認めないという排他主義的な面もあったようだが、八万四千の法門はすべてブッダ・釈尊という一つの源から出ており、かつそれらが併存していなければならない、という発想があった。これは、多元主義的な発想を含んでいたものだと思う。

④ 多元主義②

上の多元主義①は、最終的に真理・救済は一つ、という考え方だが、現在のグローバル化した社会の中では、真理・救済を一つに統一する必要はあるのか、という考え方も出てきている。別の言い方をすれば、どの宗教の真理・救済も絶対的ではない、ということだ。これは、実際に宗教を信じている人には違和感をおぼえる発想かもしれない。しかし、異なった宗教の併存というものを突き詰めていった結果、真理・救済は複数あるし、そのあいだに優劣はないという考え方が最近では出てきている。

先ほどの山頂のたとえで言えば、山頂は複数あり、山道も複数ある、ということになるかと思う。いずれの山頂からの眺めもすべてすばらしいもので、優劣はない、ということだ。

このような考え方は、仏教の伝統的な考え方には見られなかったかもしれない。ただし、他宗教との対話を考えた時、仏教の外側に別の真理がある、という考え方も、これからは求められるのかもしれない。

2. 宗教間対話の技術：因明

最初に述べた通り、仏教ではインド以来、問答というものを積み重ねてきたが、そのなかで培われてきた問答の技法として、因明というものがある。インドで作られた討論術、論理学の伝統が伝えられたものだ。これは、日本の仏教の中で（少なくとも中世ぐらいまでは）広く学ばれてきたものである。

これが興味深いのは、仏教徒が作り上げたものであるにもかかわらず、「仏教の枠組みを超えて、如何なる教理的立場からも受け入れられる一種の形式論理学を目指した」（桂紹隆2012「仏教論理学の構造とその意義」『シリーズ大乗仏教9　認識論と論理学』春秋社）とされることである。あるいは「複数の聖典＝信念の存在を認め、それらの並存状況下で有効な論理学の構築を追求していた」（小野基2010「相違決定（viruddhāvyabhicārin）をめぐって」『インド論理学研究』1）とも言われている。つまり、先ほどの多元主義②のような発想で作られている。

現在では、この因明を学ぶ人はほとんどいないが、特に日本の古代、中世には盛んに学ばれていた。このような技法が学ばれていた、という事実は無視できないことだろうと思っている。

おわりに

私たちは、仏教の作り上げてきた智慧にアクセスし、学ぶことができる立場にいる。

「古」の人たちが培った智慧に倣いながら、対話というものを自分で実際に実践してみるというのが、現代の社会では求められているのではないかと思う。

対話というのは、相手の立場を尊重し、相手の言葉を受け入れるところから始まる。自分の信念と異なる考えを受け入れるということは、自分が変わってしまうことだ。仏教の教えの根幹にある「諸行無常」は、（シンポジウムでケネス田中先生も仰っていたことだが）まさに自分が変わることだろうと思う。異文化との対話について、私たちが仏教から学べることは、多いのではないだろうか。

日本仏教に迫る異文化交流

武蔵野大学名誉教授
ケネス 田 中

1.「日本仏教」自体が異文化交流の証

言うまでもなく、仏教はインドで発生し、中国や朝鮮半島で育てられた仏教が日本に伝わったのである。これ自体が異文化交流の証である。

そして、19世紀の終わり頃から現代に渡って外国からの交流があり、それを象徴するのが、「仏旗」だと思っている。今も多くの日本のお寺で使用されている仏旗は元々、アメリカ人Henry Olcott（オールコット）が、セイロンで作成されたものを日本に持参したのだ。それには、上座部と大乗仏教が団結して、キリスト教のアジアでの伝道の脅威に対抗する狙いがあったそうだ。私は、その考えは正論だったと思っている！（笑）

また、かの有名な芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の元となったのは、Paul Carus（ケーラス）というアメリカ人が書いた小説に基づいたものだ。他にも明治時代に来日し、仏教を推進する美術や文学の発展に貢献した者としてEarnest Fenollossa（フェノロサ）、William Bigellow（ビゲロー）、Lafcadio Hearn（小泉八雲）などが挙げられる。

以上のように、古代から近代まで、日本仏教も異文化を受けいれてきたのである。

2. 第二次世界戦争後、欧米における仏教の広まり

仏教は1960年代に、2600年の歴史の中で初めて西洋の壁を超えて、欧米の一般社会に普及し始め、仏教に興味を持つ人々が急増した。

アメリカでは、現在全人口の約1パーセント（330万人）が仏教徒であり、そのほかには、十倍ぐらいの人々が、「宗教・スピリチュアリティとして仏教に強い影響を受けている」とある学術調査で答えた。

例えば、アップル社の創立者の故Steve Jobs（ジョッブス）も座禅に惹かれ、結婚式は仏教の僧侶が司祭した。また、2005年のスタンフォード大学の卒業式では、「死」をテーマとし、仏教的な死生観を主張して卒業生たちを励ましたことはよく知られている。

この仏教の浸透ぶりは、一般社会でも仏教的ユーモアが通じることが象徴していると言える。その代表的なものは、「何故ブッダは、ソーファの下の狭い隙間を電気掃除機で掃除ができなかたのでしょうか？答え：それは、ブッダには、アタッチメントがなかったからです。」（笑）（アタッチメント＝付属品及び執着！）

3. マインドフルネス瞑想の逆輸入という現象

アメリカでは毎日、約2千万人が何らかの「瞑想」を行っていると言われていて、その半分ぐらいは、仏教の瞑想法（念、sati）に基づくマインドフルネス瞑想であると推定されている。

このマインドフルネス瞑想は、日本に逆輸入され、多くの日本の若者にも人気を呼んでいる。数年前、東京の日比谷講堂でマインドフルネス瞑想の講習会に出席して驚いたのは、千人ほどの参加者が殆ど若者であったことだ。お寺に集まる年齢層との違いが鮮明であり、これは日本仏教が将来を考えるに当たって無視できない出来事だと思う。

マインドフルネス瞑想については、ストレス軽減や仕事の有効性の向上など、世俗的な要素が主な目的になっているという点で批判的な意見も聞くが、私は、仏教側として反対するのではなく、より積極的に取り入れても良いと考える。それで仏教が目指す「抜苦与楽」が少しでも実現するなら、拒否する必要もないと思う。むしろ方便として採用し、それがきっかけとなり、より多くの人が少しでも幸せになり、また、仏教に興味を持つ

ようになることは歓迎するべきだ。

4．英語で仏教を教える　―日本仏教の教化に関する異文化的要素

私はこの10年間、東京の仏教伝道協会で、「英語を通しての初歩仏教の講座」を担当させてもらっている。最後の5年間は、試験や宿題の基準を満たした参加者に、講座の「修了証書」を授与してきた。この中には、専門ツアガイドもいるが、そのほかには、仏教寺院などでツアガイドのボランティアする人も出てきている。

講座の参加者からよく聞くことは、英語を通して仏教を学ぶと、「新鮮だ」、「わかりやすい」という意見だ。例えば、「諸行無常」を英語にすると「Everything is changing」となり、「change、変化」と表現すれば、すんなりと理解でき、また、平家物語の冒頭での「諸行無常」がもたらす感傷的過ぎる意味も薄くなるそうだ。

この英語の講座での参加者は、お寺の法話に参加される年齢層とは若い人々が比較的多くなっている。これは、若い世代に仏教に興味を持ってもらえる方法の一つとなると思う。従って、英語が達者な僧侶の方々は、英語で仏教を伝えることを、有効な方便として採用することを推薦する。単語だけでも英語で表現するのも効果があると思う。このような異文化的な要素が、仏教の教化に役立つ可能性が大いにあるのではないだろうか。

5．現代日本の異文化の状況への仏教的対応

日本在住の外国人の数は、288万人と言われている。その他に、コロナ禍が終息した後に観光客がまた訪れるようになれば、外国人の数はもっと増える。日本も以前より異文化の要素が高まっているのだ。その中で、日本仏教は、仏教の根幹である価値観をもっとしっかりと掲げて、仏教界だけでなく日本社会全体に常に発信するべきではないだろうか。

その基本的な価値観として、私は、1）慈悲、2）平等観、3）一体観の三つを掲げる。慈悲と一体観の意味は明らかだと思うので、ここでの説明は省略する。残る「平等観」とは、みんなが「同じである」と言うことではない。日本に住んだり訪れたりする外国人、または、日本人も「同じ」ではない。多様なのだ。この中で、平等観とは、その異なる人々の「尊厳」を同じように、平等に認めるということである。平等観とは、他者への見方、他者との関係に関わることだ。つまり、「みんな違って皆な良い」の世界を指すのだ。それは、釈尊がカースト制度による差別を認めなかったことに基づく仏教の根本精神であるからだ。この三つの価値観が推奨されれば、日本仏教に迫る異文化交流も高まり、繁栄し、日本社会に良い影響を与えることになると確信している。

掲載紙から

BUKKYO TIMES WEEKLY　週刊仏教タイムス　2021年(令和3年)2月4日　第2884号

全日仏

島根大会「やり抜く」

五輪関連イベント　世界平和願いの祭典に協力

清水谷副会長

全日本仏教会（全日仏）は1月29日、最先端ICTを活用する新年学習会（仏教のDX（デジタルトランスフォーメーション）化について）をオンラインで開催。関会にあたり大谷光淳会長（浄土真宗本願寺派門主）の挨拶に続いて、副会長（清水谷）方法を変えてもやり抜こうと意思を固めた」と表明した。また東京オリンピック・パラリンピックの関連イベントである「世界平和願いの祭典」（7月、築地本願寺）に向け松浦理事長は「積極的に協力」する旨を伝えた。

この日は冒頭、宮船で亡くなった人を追悼し、理事会と恒例の新年懇親会が定されていたが、新型コロナウイル感染症の拡大に伴う緊急事態宣言が発せられたため延期となった。理事会は3月に有に開催される運びだ。

最初に大谷光淳会長が新年の挨拶を述べた（要旨別欄）。新型コロナで亡くなった人々の追悼、罹患者を慰問、医療従事者に感謝の言葉を述べた。

次に、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う緊急事態宣言が発せられたため延期となった理事会を開催した。

5人の副会長を代表して、清水谷副会長が挨拶。コロナ禍で延期されたが、10月の島根大会に対して、役員たちと話し合い、「目標は変えない」という意思を固めたと表明した。

また、「現状は厳しいが、仏教人々の心の支えとなり、仏教の力を伝えることが大切だ」と強調した。

島根県仏の清水谷会長が挨拶。コロナ禍で延期されたが、10月の島根大会に対して、役員たちと話し合い、「目標は変えない」と改めて表明した。

また、「現状は厳しいが、仏教人々の心の支えとなり、仏教の力を伝えることが大切だ」と強調した。

一方で、「やり抜くためには、方法を変えてもやり抜くことはできない」と改めて表明した。

一方で、10月1日（土）に松江市内で行われる、清水谷会長は全日本仏教会（全日仏）の挨拶に続いて、副会長（清水谷）方法を変えてもやり抜くことを表明した。

2月1日（土）に松江市内で行われる、清水谷会長は全日本仏教会（全日仏）の挨拶に続いて、副会長（清水谷）方法を変えてもやり抜くことを表明した。

一方で、10月1日（土）に松江市内で行われる、清水谷会長は全日本仏教会（全日仏）の挨拶に続いて、副会長（清水谷）方法を変えてもやり抜くことを表明した。

また、「現状は厳しいが、仏教人々の心の支えとなり、仏教の力を伝えることが大切だ」と強調

10月2日 島根大会迫る

開催方式変更 県外者はオンライン参加

10月2日開催の第45回全日本仏教徒会議島根大会は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い緊急事態宣言と蔓延防止重点措置の地域がさらに増加したことから、県内在住者は会場もしくはオンライン参加とし、県外在住者はオンラインのみの参加とした。全日本仏教会（全日仏）と島根大会実行委員会事務局が発表した。申込み締切りは9月15日。

島根県仏教会（清水谷善圭会長・天台宗）は4年ほど前から準備を進め、平成29年（2017）の第44回福島大会で次回開催地として島根県をアピールした。昨年のコロナ禍により1年延期したうえ、2日間の日程を1日のみにするなど見直しをしてきた。6月24日には全日仏と共に清水谷会長の自坊、安来市清水寺で島根大会100日前法要を執り行い、大会円成と新型コロナの終息を祈願した。

この頃までは感染対策を徹底しての現地集合による開催を目指していた。しかし7月に入って東京都に宣言が発出され、さらに8月末で24都道府県に及び、より一層の感染対策が求められることとなった。刻々と変化する状況から県外在住者はオンライン参加のみとなった。

大会テーマは「異文化理解と共存―仏の心を稽古する」。会場は松江市の島根県民会館。当日は午後1時から開会法要・世界平和を願う法要に続いて、記念講演「仏の心を稽古する」が行われる。講師は宗教学者の釈徹宗氏（相愛大学教授）。午後3時半から閉会式典となる。

申込みは全日本仏教会HPか島根県仏教会HPの申込みフォームから。参加費1000円は事前納金（後日、プログラム、記念品送付）。

今月15日申込み締切り

困難あったが結束力強まる

清水谷善圭・島根大会会長のコメント

いろいろ困難がありましたが、おかげさまで実行委員会の結束力がこれまで以上に強くなったと思っています。大変な状況だけれども、喜ぶべきこともありました。今は、なるようにしかならないよねと言いつつ、その時その場で全力を尽くそうと言ってくれています。

県外の方はオンライン参加となりますが、より多くの方がネットを通じて参加できる機会になったと思います。大会会長として、苦しさはあるがやりがいのある大会になると考えています。

仏教タイムズ　2021年9月2日

山陰中央新報　2021年9月9日

山陰中央新報
2021年（令和3年）10月3日（日曜日）

仏法通じ世界平和願う

全日本仏教徒会議 島根で初開催

大会の開会を記念して営まれる法要＝松江市殿町、島根県民会館

仏教の「和」の教えを基に世界平和への願いを発信する全日本仏教徒会議が2日、松江市殿町の島根県民会館であった。島根では初開催で、県内から集まった僧侶たちが法要を厳かに営み、平安を祈った。

1953年から全国各地で開かれ、45回目の今大会は全日本仏教会と島根県仏教会が主催。昨年秋に開催予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大のため延期し、オンライン配信とした。会場には約200人が集い、オンライン配信は約300人が視聴した。

大会では、開会記念と世界の平安を祈る法要を執り行ったほか、県内各地の寺院の呼び掛けで集まった写経や、前回開催地の福島県から贈られた桜の苗木を奉納した。

講演した相愛大（大阪市）副学長で如来寺住職の釈徹宗さん（60）は、新型コロナ禍での宗教の役割に触れ「自分のことを考えるのは他者のことを考えること。暮らしを見つめ直す契機にあるので、仏法を通じての橋渡しを工夫していきましょう」と説いた。

次回開催地の山梨県仏教会に大会旗を引き継いだ島根県仏教会の清水谷善圭会長（74）は「状況が刻々と変化する中で、宗派・地域を超えて協力でき成功につながった」と喜んだ。（藤本ちあき）

紙面編集・井上　正和

山陰中央新報　2021年10月3日

第45回全日本仏教徒会議 初のオンライン開催

七難八苦越え島根大会

挨拶する清水谷大会会長

新型コロナウイルスの感染拡大により1年延期された第45回全日本仏教徒会議・島根大会は2日、「異文化理解と共存―仏の心を稽古する」をテーマに松江市の島根県民会館で開催された。大会はオンラインでライブ配信された。大会宣言ではコロナ禍の世界に言及しながら「ゆるしあう心」「互いに譲りあう心」「慈しみあう心」を稽古」すると明示した。主催は全日本仏教会（全日仏）と島根県仏教会。

最初に開会法要が清水谷善圭大会会長（島根県仏教会会長、天台宗）を導師に、続いて世界平和を願う法要が伊東充伸大会実行委員長（曹洞宗）を導師にそれぞれ厳修された。

開会式典では清水谷大会会長が挨拶。自坊のある安来市出身の戦国武将、山中鹿之助の「我に七難八苦を与えたまえ」を紹介しながら「本大会の準備はまさに七難八苦。コロナ禍以前から苦難の連続であった」と振り返った。一般門信徒・檀信徒と仏教界の距離や各寺院の県仏に対する認知度の低さを実感したという。

さらにコロナ拡大により開催方式が一転三転したことを報告しつつ、その影で実行委員会の力強い協力があったとし、「開催決定から4年間、多くの試練を乗り越えたことで実行委員会の心が一つになり、この日を迎えることができた」と安堵したように話した。

大会総裁で全日仏の大谷光淨会長（浄土真宗本願寺派門主）はビデオメッセージで島根大会を歓迎すると共に、今夏、島根県を襲った豪雨と台風被害の被災者に哀悼と台風の言葉をおくった。

続く記念講演は大会テーマの副題「ほとけの心を稽古する」に添って宗教学者の釈徹宗氏（相愛大学副学長・本願寺派僧侶）が話した。新型コロナ以後、顕著になっている二項対立の見方の問題点や現代人の時間の捉え方などを述べた。

最後の閉会式典では、前文と宣言で構成された大会宣言が伊東大会実行委員長より発表された（宣言は別掲）。

大会宣言

我々仏教徒は釈尊のみ教えを守り、常に「ゆるしあう心」「互いにゆずりあう心」「慈しみあう心」を稽古し、地域の平安、世界の平和を求め「己を忘れ、他を利す」生活を続けることを誓います。

仏教タイムズ
2021年10月7日

公益財団法人全日本仏教会役員一覧

【会 長】
大谷 光淳（浄土真宗本願寺派 門主）

【副会長】
瀬川 大秀（真言宗御室派 管長）
西山 明彦（律宗 元管長）
原井 日鳳（法華宗〈本門流〉元管長）
清水谷 善圭（島根県仏教会 会長）
東伏見 具子（公益社団法人 全日本仏教婦人連盟 会長）

【評議員】
髙橋 直人（曹洞宗）
宮本 義宣（浄土真宗本願寺派）
齋藤 明聖（真宗大谷派）
宮林 雄彦（浄土宗）
生駒 雅幸（日蓮宗）
川島 宏之（高野山真言宗）
栗原 正雄（臨済宗妙心寺派）
杜多 道雄（天台宗）
倉持 光恭（真言宗智山派）
星野 英紀（真言宗豊山派）

【理事長】
戸松 義晴（浄土宗）

【理事】
成田 隆真（曹洞宗）
松原 功人（浄土真宗本願寺派）
木全 和博（真宗大谷派）
木内 隆志（日蓮宗）
添田 隆昭（高野山真言宗）
上沼 雅龍（臨済宗妙心寺派）
杜多 徳雄（天台宗）
小峰 立丸（真言宗智山派）
小島 一雄（真言宗豊山派）
岡野 正純（孝道教団）
吉田 明良（和宗）
守山 雄順（聖観音宗）
一宮 良範（念法眞教）
新美 昌道（東京都仏教連合会）
井澤 孝一（神奈川県仏教会）
松永 直樹（山梨県仏教会）
長澤 香静（一般財団法人 京都仏教会）
本山 瑞峰（岡山県佛教会）
青木 晴美（公益財団法人 仏教伝道協会）

【監事】
三吉 廣明（法華宗本門流）
木村 匡成（公認会計士）
倉持 秀裕（一般財団法人 埼玉県佛教会）

【事務総局】
事務総長　木全 和博
総務部部長　和多 善秀
総務部次長　西岡 慈圓
総務部主事　山崎 美由紀
財務部部長　朝倉 俊隆
財務部主事　小山 智恵
社会･人権部部長　山本 雅彦
社会･人権部次長　坂本 太樹
社会･人権部次長　福田 昇衍
広報文化部部長　関　勝道
広報文化部次長　平井 敦夫
国際部部長　掬池 友絢
国際部次長　下島 章裕
関西支局　真言宗智山派宗務庁内
顧問弁護士　長谷川 正浩

公益財団法人全日本仏教会加盟団体一覧

■加盟宗派（59）
天台宗
天台真盛宗
金峯山修験本宗
天台寺門宗
聖観音宗
和宗
孝道教団
妙見宗
念法眞教
高野山真言宗
真言宗智山派
真言宗豊山派
真言宗大覚寺派
新義真言宗
真言宗善通寺派
真言宗御室派
真言宗山階派
真言宗泉涌寺派
真言宗醍醐派
真言宗国分寺派
真言宗須磨寺派
真言宗中山寺派
真言三宝宗
信貴山真言宗
真言宗犬鳴派
東寺真言宗
浄土宗
浄土宗西山禅林寺派
浄土宗西山深草派
西山浄土宗
浄土真宗本願寺派
真宗大谷派
真宗高田派
真宗佛光寺派
真宗興正派
真宗木辺派
時宗
融通念佛宗
臨済宗妙心寺派
臨済宗南禅寺派
臨済宗円覚寺派
臨済宗建長寺派
臨済宗天龍寺派
臨済宗相国寺派
臨済宗東福寺派
曹洞宗
黄檗宗
日蓮宗
法華宗（本門流）
法華宗（陣門流）
法華宗（真門流）
顕本法華宗
本門佛立宗
本門法華宗
法相宗
聖徳宗
華厳宗
真言律宗
律宗

■都道府県仏教会（37）
北北海道仏教会連盟
青森県仏教会
岩手県仏教会
福島県仏教会
茨城県仏教会
栃木県仏教会
群馬県仏教連合会
（一財）埼玉県佛教会
千葉県仏教会
東京都仏教連合会
神奈川県仏教会
新潟県仏教会
石川県仏教会
福井県仏教会
山梨県仏教会
長野県仏教会
岐阜県仏教会
静岡県仏教会
愛知県仏教会
滋賀県仏教会
（一財）京都仏教会
京都府仏教連合会
大阪府佛教会
兵庫県仏教会
和歌山県仏教会
鳥取県仏教連合会
島根県仏教会
岡山県佛教会
（一社）徳島県仏教会
香川県仏教会
愛媛県仏教会
高知県仏教会
福岡県仏教連合会
長崎県仏教連合会
熊本県仏教会
宮崎県仏教連合会
沖縄県仏教会

■仏教団体（9）
（公社）全日本仏教婦人連盟
（公財）仏教伝道協会
（公社）日本仏教保育協会
（公財）国際仏教興隆協会
東京ブディストクラブ
全日本仏教青年会
（一社）日本仏教鑽仰会
（一社）仏教情報センター
日韓仏教交流協議会

島根大会実行委員会一覧

【大会総裁】 大谷光淳

【大会副総裁】 瀬川大秀　原井日鳳　西山明彦　東伏見具子

【大会長／勧募長】 清水谷善圭

【実行委員長】 伊東充伸

【副実行委員長】 吉田明弘（副勧募長）

【事務局長】 池上幸秀　**【事務局次長】** 門脇直哉

【事務局員】 橘　正彰　上野泰裕　大野道源

【監事】 村上正光　岡本亮啓

【幹事】 佐々木了慎　三明浄信　籠　純吾　故 窪田隆道

【総務部】 茶円宥勝（幹事）　岩田泰成　楫野光範　本田定裕
杉原顕道（副勧募長）　小川義眞　石原宣真

【企画・式典部】 柳楽一学（幹事）　金田範由（副勧募長）
北島清秀　飯塚大幸（副勧募長）
若槻嘯月　松浦快遍　永戸尚樹　吉長裕教

【イベント部】 原　知昭（幹事）　永見宏樹　中村裕光　西古孝志
伊藤隆邦　須田哲史　村上壮樹　村上充峰
森井宗淳　若槻哲成

【財務部】 清水谷善暁（幹事）　大坂恵司　赤井賢照

【記録・広報部】 河原八郎（幹事・副勧募長）

【運営委員】 渡部卓史　金森文秀　佐々木弘信　小川裕史
森田裕光　尾崎幹雄　三輪憲道　藤井哲眞
梅田淳敬　松本憲宗　千葉哲之　福田快宥
重栖隆快　禿　正文　大北能生　山﨑禪雄
加藤文保　杉山秀峰　加藤琢朗　大道正行
三上良紀　新間信應　田中英潤　松本慈弘
林　干城

出仕者一覧

【安来市仏教会】 島田幸正（長台寺）　荒木清純（巌倉寺）　金子基典（一乗寺）
清水基宏（洞正院）　小村修司（仲仙寺）　芳川隆弘（常福寺）
葦原浩顕（広厳寺）

【松江仏教会】 西尾清文（龍雲寺）

【大社町仏教会】 勝島徹正（願立寺）　原　量敬（安養寺）

【出雲仏教会】 春日正信（光明寺）　伊藤隆邦（浄行寺）　糸賀太道（観知寺）
曽田錠光（大念寺）

【仁多仏教会】 卯木昌史（専福寺）　楠　京子（光善寺）　安部和雄（覚融寺）
池田哲雄（善勝寺）　安藤省晴（日光寺）　窪田幸正（報恩寺）
多賀大樹（聞善寺）

【高野山真言宗】 山本雄正（乗光寺）　大北勝圓（千手院）　佐々木智範（宗昌寺）
長瀬　祐（東泉寺）　小笠原弘尊（満福寺）金田崇範（自性院）
吉松恵祐（霊感寺）

【浄土真宗本願寺派】 黒河敬生（山陰教堂）　松田周道（山陰教堂）
菅　龍慈（山陰教堂）　熊谷蓮生（山陰教堂）

【真宗大谷派出雲組】 春日正信（光明寺）　河野正道（永泉寺）　蓮岡　徹（大乗寺）

【曹洞宗島根県第二宗務所】 堀江晴俊（洞光寺）　須田絹代（常喜寺）
村上由美（安養寺）　諏訪美子（洞光寺）
渡部洋子（神光寺）　三村純子（延命寺）

【いずも曹洞宗青年会】 藤島義信（長見寺）　辰己純也（善慶寺）　佐野晃孝（高禅寺）
堀江紀宏（洞光寺）　芳川隆弘（常福寺）　若槻光哉（萬松院）
藤原玄光（観音寺）　池上哲由（洞光寺）　清水啓孔（洞正院）
佐藤芳紹（善福寺）　佐藤弘昌（龍覚寺）　諏訪弘史（洞光寺）
諏訪文成（洞光寺）　柏崎啓秀（正林寺）　曽根慎吾（玉雲寺）

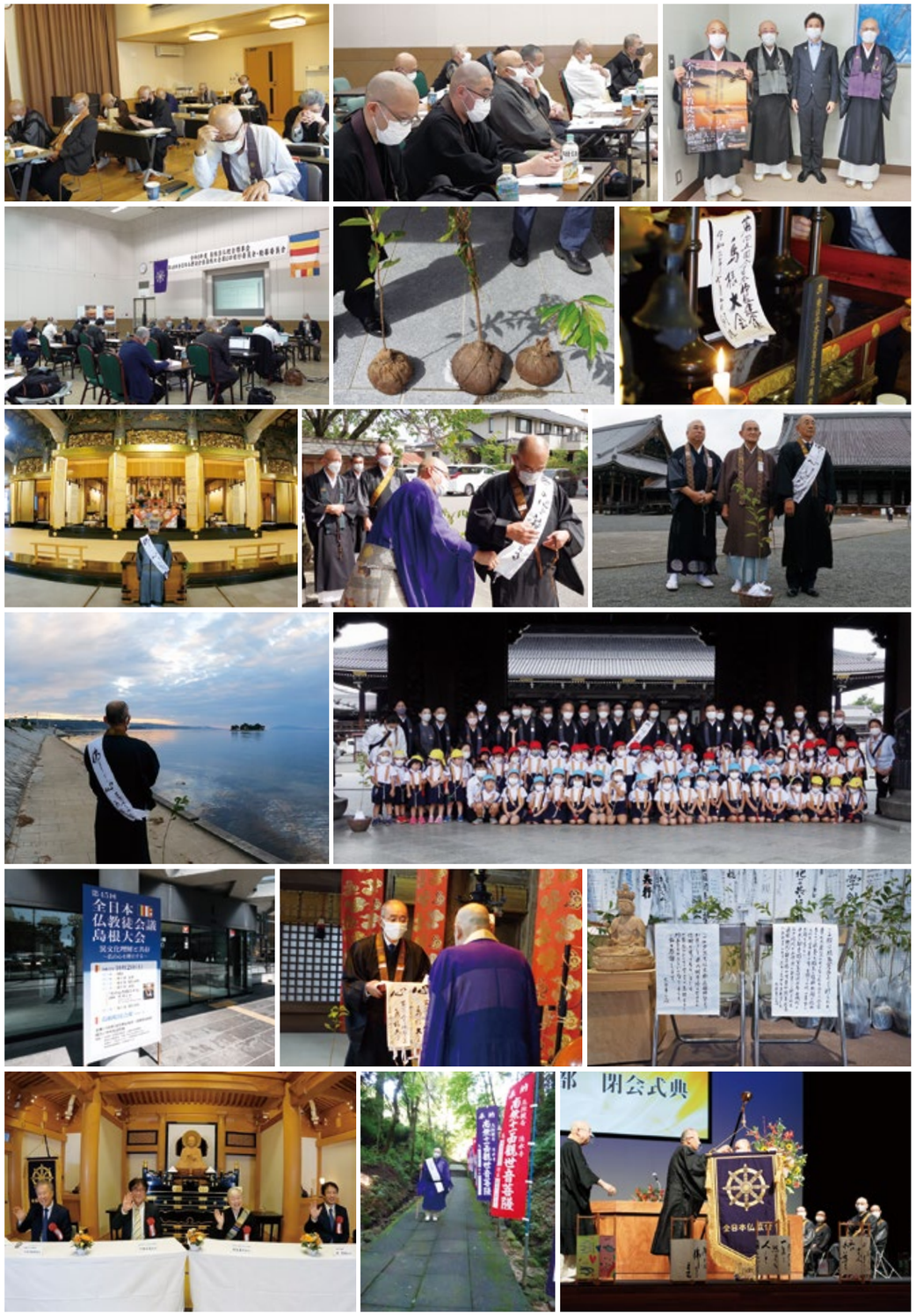
【臨済宗妙心寺派】 園山大寛（海禅寺）　昌子宗賢（西光寺）　中筋祖啓（一畑寺）
岩浅慎龍（大龍寺）　加藤泰寛（日蔵寺）　吉岡和玄（永徳寺）
武藤穂高（大龍寺）　醍醐靖綏（雲樹寺）　大錦清禅（禅林寺）
影山大圓（圓通寺）　高橋英俊（康國寺）　原　匡秀（高松寺）
倉橋弘基（勝定寺）

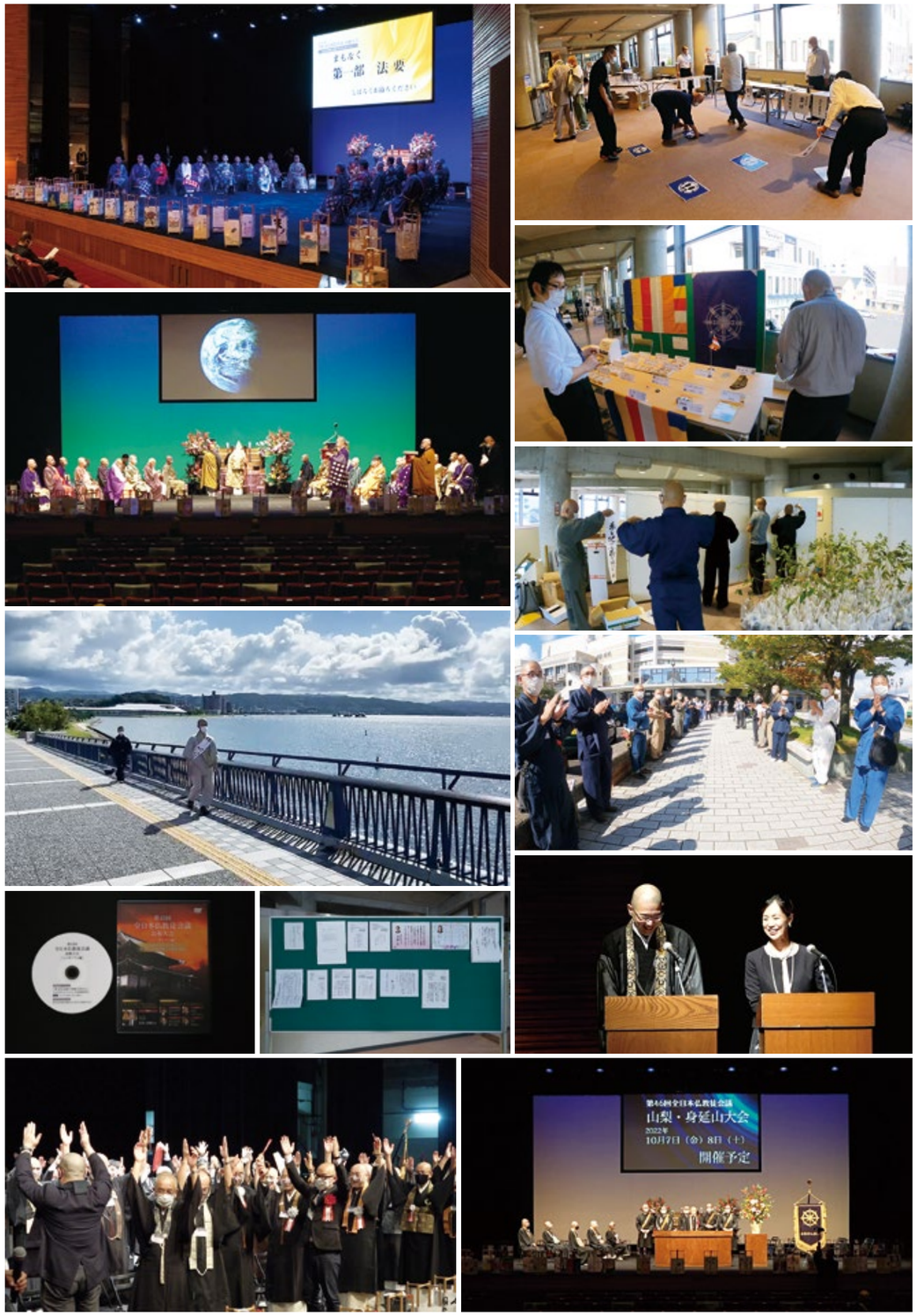
【臨済宗南禅寺派第10部】 少林浩道（城安寺）　原田秀行（観音寺）

【浄土宗出雲教区・石見教区】 内田広平（信楽寺）　本田哲平（善導寺）
曽田錠光（大念寺）　西村昭仁（長福寺）
本田行信（妙雲寺）　山崎拓馬（大願寺）

【司会者】 森脇順子　小川義眞（薬師院）

【手話通訳】 田中文栄　長廻芳行　藤原泰子


閉会式典


まもなく
第一部 法要
山梨・身延山大会
開催予定

第45回 全日本仏教徒会議 島根大会紀要

『異文化理解と共存』

～仏の心を稽古する～

発行日：2022年7月13日

発　行：第45回全日本仏教徒会議 島根大会実行委員会

編　集：第45回全日本仏教徒会議 島根大会実行委員会

公益財団法人 全日本仏教会

制　作：有限会社 米子プリント社

〒683-0845 鳥取県米子市旗ヶ崎2218番地

TEL：0859-22-2155